

I 研究成果報告書（論文）

- 1 「幕末薩摩藩の国事周旋と他藩対応～九州太宰府における五卿の警衛・応接・国事周旋を中心に～」(平成29年度)

日本経済大学経済学部 准教授 竹川 克幸

論文の概要

【研究テーマ】 幕末薩摩藩の国事周旋と他藩対応～九州 太宰府における五卿の警衛・応接・国事周旋を中心に～	
【氏名】竹川克幸	【所属】日本経済大学経済学部経済学科 准教授
〔はじめに〕 本研究においては、福岡藩（支藩の秋月藩も）・久留米藩・佐賀藩・熊本藩とともに多くの藩士を警衛で軍事動員しているのに対し、薩摩藩の政治史研究ではこれまで余り注目されてこなかった五卿の西遷と薩摩藩の関連性、特に慶応年間の太宰府に西遷（西鼠・御動座）・滞在した三条実美ら五卿の警衛や他藩との応接・周旋などの国事周旋活動を中心に、幕末薩摩藩の国事周旋や他藩対応を考察し、その実態から薩摩藩が五卿の警衛、応接、周旋の過程で進めようとしていた薩長（筑）一和から薩長同盟（連合）の政治過程に基づく、九州諸藩の同盟・同志化や薩摩藩支持層の組織化、九州における政治的優位性の確保、周辺有事・実戦に向けた兵糧や武器、軍資金調達の根回しや後方支援体制の確立、軍事演習などの軍事拠点づくり、地域での人的交流や情報収集などの地域戦略を解明する。	
〔本 論〕 「はじめに」では、問題の所在と従来の研究史の整理を提示し、第1章 五卿の西遷と薩摩藩（元治元年～元治二年・慶応元年）では、薩筑長一和・薩長和解周旋、五卿の西遷と太宰府移転の過程の概要を述べた。第2章 薩摩藩の五卿の警衛・周旋・応接と志士の往来（元治二年・慶應元年）では、薩摩藩の五卿守衛 薩摩・筑前福岡・肥後熊本・筑後久留米・肥前佐賀の五藩による太宰府滞在と警衛、西郷隆盛や吉井幸輔、黒田嘉右衛門ら薩摩藩の警衛、応接、周旋活動の実態を中心に述べた。また五卿と薩摩藩との関りで坂本龍馬や五卿随従者の中岡慎太郎や松屋栗原孫兵衛ら志士の往来・交流の実態について明らかにした。第3章幕府目付小林甚六郎の来宰と薩摩藩の対応（慶応二年）では、薩摩藩の黒田嘉右衛門や大山格之助の幕府目付小林甚六郎に対する対応の実態を薩摩藩の政治意図や幕府への対抗姿勢を交え明らかにした。第4章 五卿の帰洛・政治復帰と薩摩藩の周旋（慶應三年）では、五卿の帰洛・政治復帰に果たした薩摩藩の応接・周旋の役割と政治意義について明らかにした。「おわりに」では、まとめと今後の展望と課題を述べた	
〔まとめ〕本研究では、特に実際に五卿の警衛、応接・周旋で太宰府を訪れ、滞在し、太宰府を拠点に活動した西郷隆盛、吉井幸輔（友実）、大山格之助（綱良）、黒田嘉右衛門（清綱）、前田杏齋、渋谷彦介、蓑田新平（伝兵衛）など薩摩藩士や中岡慎太郎ら五卿に随従した他藩の志士、坂本龍馬など五卿の下を訪れた志士達の事績・活動や人物像、書簡の往来など他藩との交流・応接に注目し、周旋活動を行う人物の視点から国事周旋や他藩対応（応接）の実態を明らかにした。また合わせて、太宰府で五卿や薩摩藩（藩士）を支援・周旋し交流した松屋・栗原孫兵衛や医師・陶山一貫、武蔵温泉奉行・松尾山太夫（光昌）など地元、太宰府での薩摩藩の支持協力者などの活動や同志的結合、他藩との政治協力・連携や情報交流の実態、その機動性や政治的優位性を明らかにした。	

幕末の薩摩藩の国事周旋と他藩対応

～九州 太宰府における五卿の警衛・応接 国事周旋を中心に～

日本経済大学 経済学部経済学科准教授 竹川克幸

はじめに

本稿は、幕末の薩摩藩の国事周旋と他藩対応について、特に元治元（1864）年～慶応三（1867）年かけて展開された薩摩藩の九州、太宰府における五卿の警衛・応接・国事周旋について論じたものである。

文久三（1863）年の八・一八の政変を契機に、三条実美ら長州藩と連携した尊王攘夷派の公卿7人が政治失脚、京都を追放され都落ちし、長州藩領まで落ち延びた一連の事件、「七卿落ち」を発端とする元治～慶応年間の「五卿の西遷」、いわゆる五卿の筑前福岡藩領・太宰府への移転（動座）・送迎・滞在（謫居）である。

「五卿の西遷（西竄）」については、「五卿送迎」、長州から筑前太宰府への移転前後の政治状況を中心に、土方久元（楠左衛門・南大一郎）や水野正名（溪雲斎）、尾崎三良（戸田雅樂）、中岡慎太郎（大山彦太郎・石川清之助）ら五卿随従者に加え、西郷隆盛（吉之助）、大久保利通（一蔵）、木戸孝允（桂小五郎）、伊藤博文（俊輔）、高杉晋作（元治元年の筑前亡命、太宰府への潜伏の伝承有）、坂本龍馬など、太宰府・五卿の元を訪れた勤王の志士達の「往来と交流、周旋活動」の事蹟が、「征長解兵」・「薩筑長一和」・「薩長和解」など福岡藩勤王派志士の活躍の一つ、「明治維新の起原」を持つ「明治維新の策源地・太宰府」の象徴的な出来事として捉えられてきた。特に戦前期は、三条実美や東久世通禧ら五卿自身や土方久元や水野正名、尾崎三良ら随従者自身はもちろん、関係した旧藩士や旧志士達による明治維新の回顧録や懐旧談、伝記なども含め、いわゆる「七卿落ち」から「五卿の西遷」そして「五卿の帰洛・政治復帰」までの政治過程、彼らの維新回天の功績として顕彰されてきた。また後に筑紫史談会を設立した江島茂逸や高原謙次郎ら郷土史家の編纂・著述した郷土誌の中でも、明治三十五（1902）年の菅公一千年忌の大祭を契機に「菅原道真公のご神徳」による「天神様菅公の聖地太宰府」への「五卿の送迎・遷座・流寓」という独特の史観で語り継がれてきた。特に、『維新起原太宰府紀念編』の中で「五卿の西遷（送迎）」は「菅原道真の左遷」「蒙古襲来（元寇）」らと共に「太宰府の三大紀念」の一つとして最重要視されてきた⁽¹⁾。

戦後も長沼賢海氏や井上忠氏、中野泰雄氏らによる「幕末の太宰府・五卿の西遷」に関する諸研究があった⁽²⁾。特に、長沼氏や井上氏は基礎史料・資料を用い、太宰府における五卿の政治活動や謫居生活の実態、五卿を周旋する地元の人々。特に地域で金融業や酒造も営む庄屋・大庄屋や旧家など地域の有力者層や医師、文化人、往来した志士との交流まで多くの分析・視点を指摘された。また中野氏により政治史の視点から「七卿落ち」から「五卿の西遷」までの政治過程について、「第一次・第二次征長戦、薩長連合（同盟）、列侯・賢侯会議・兵庫開港・大政奉還」など幕末政局の事件・段階ごとに分析・考察され、従来「七卿落ち」の延長で述べられ理解されてきた「五卿の西遷・太宰府移転」についての基礎研究は確立していった。また『太宰府市史』近世通史編では、梶原良則氏により、幕末福岡藩の政治動向や政治史的意義と共に「五卿の太宰府移転」の政治過程について幕末福岡藩の政治動向や幕末太宰府地域の政治概況について五卿の太宰府移転を軸に詳述された。

また日比野利信氏により、「古都太宰府」と「維新の記憶」などの視点から、「五卿の太宰府移転・五卿送迎についての顕彰と研究」の再検討、地域の歴史像の形成過程についても再評価がなされた(3)。特に日比野氏は、五卿の西遷が幕末福岡藩の政治過程で果たした役割はもちろん、近代になり明治維新における福岡藩や勤王派の事蹟の顕彰にまで「五卿の西遷」が影響を与え続けたことを明らかにされた。そして近年では、「五卿西遷一五〇年記念」の九州歴史資料館での企画展示なども開催され、一瀬智氏による展示解説や関係史料・資料の再検討や丸山雍成氏や古城春樹氏、杉谷昭氏、力武豊武氏、刑部芳則氏などによる「五卿の西遷」に関する考察や再検討もなされた(4)。

従来は福岡藩との政治動向の関連で検討されることが多かった「五卿の西遷」について、丸山氏による筑前福岡藩を含む薩摩藩や久留米藩、肥後熊本藩、肥前佐賀藩など五卿の警衛を担当し太宰府に滞在した五藩を中心とした九州諸藩との関連性や幕末政局の再検討、一瀬氏による五卿の太宰府周辺地域における地元文化人や地域の有力者層との文化交流、古城氏による長州藩の政情や長府・下関との関り、杉谷氏のような五卿の日記・記録など関係史料・資料の再検討、刑部氏による三条実美ら五卿の履歴・事蹟の再検討など多角的な視点による研究へ深化していった。

そして薩摩藩藩政史、幕末薩摩藩に関する研究でも、『鹿児島県史』や『大西郷全集』、『大久保利通伝』などの戦前の郷土資料で述べられている程度であったが、近年、佐々木克氏や青山忠正氏、芳即正氏、宮地正人氏、家近良樹氏、町田明広氏などにより、第一次長州征伐における講和、「薩長和解」の政治過程を軸に、「五卿の筑前太宰府移転・送迎」・「五卿の西遷」など慶應期の薩摩藩の政治動向や政治課題の1つの画期として通史的に位置づけられてきている(5)。筆者もこれまで「五卿の西遷」について、太宰府市や筑紫野市に残る「五卿関係遺蹟」や関係史料・資料を中心に調査研究し、考察してきた(6)。

本稿では、これまで、福岡藩の幕末～明治維新时期の政治史を中心に考察されてきた、「五卿の西遷」について、薩摩藩の政治史において、主に太宰府における薩摩藩の五卿の「警衛」・「応接」・「国事周旋」という視点から薩摩藩の五卿の警衛・応接・国事周旋活動をその政治的画期ごとに、特に太宰府に滞在した警衛・応接・周旋担当の薩摩藩士や、彼らと交流した五卿随従者や往来した志士の行動や彼らの記した史料・記録類に注目しながら実態解明し、その意義について再検討してみたい。

第1章 五卿の西遷と薩摩藩

今から約一五〇年前の幕末期・慶応年間(1865～1868)、太宰府は幕末政局の表舞台に登場する。三条実美(従三位権中納言)をはじめ、三条西季知(正二位行権中納言)、東久世通禧(正四位下行左近衛権少将)壬生其修(従四位上行修理権大夫)、四条隆謨(従四位上行侍従)ら「五卿」と呼ばれる五人の尊王攘夷派の公卿達が太宰府に移転(動座・転座)・滞在する、いわゆる「五卿の西遷(西竄)」である。まず、ここでは、『五卿滞日記』や『回天実記』や『太宰府と五卿』、『五卿と太宰府』、『太宰府市史』など関係史料・資料や「五卿関係遺蹟」に関する拙稿を踏まえ、五卿の西遷、太宰府移転の前後の状況について概述する(7)。

彼ら「五卿」は、当初は七人の公卿グループ「七卿」で、尊王攘夷派の長州藩の朝廷内における政治工作に加担し、文久三(1863)年、その動きに対峙する公武合体派の薩摩藩と会津藩が画策した「八月一八日の政変」により、七卿は京都の朝廷を追放され、長州へと落ち延びた。これを俗に「七卿落ち」(「七卿西竄」)という。「七卿」のうち、澤宣嘉(正五位下行主水正、生野の変に

参加、後伊予小松藩・長州に脱出、明治新政府で外務卿へ）と錦小路頼徳（従四位上行右馬頭、病没）の二人の公卿は、途中で離脱し、「五卿」となった。「五卿」はその後長州藩領内（三田尻・山口・長府）に滞在するが、元治元（1864）年「禁門の変（蛤御門の変）」を経て朝敵となった長州藩が、幕府軍による「第一次長州征伐」を受けて降伏した後、幕府側が征長軍解兵・講和の条件として「五卿」の長州藩外への退去・引き渡しを長州藩に要求し、「五卿」の移転（「御転座」・「御動座」・「御遷座」）・受入先が争点になった。征長総督参謀の西郷隆盛や吉井幸輔ら薩摩藩士と福岡藩家老加藤司書や月形洗蔵、早川勇（養敬）ら福岡藩の勤王派の志士たち（「筑前勤王党」）の調停・国事周旋もあり、福岡（筑前）・久留米・佐賀・熊本（肥後）・薩摩（鹿児島）藩の五藩が五卿を一人・一ヶ所ずつ分担して預かるという形で、「五卿」の九州・筑前福岡藩領への渡海・移転が決定した。

「五卿」一行は、元治二（慶応元・1865）年一月、長州藩領から関門海峡を越え洞海湾に入り、筑前福岡藩領の黒崎湊・黒崎宿に上陸し、黒崎宿から木屋瀬宿、長崎街道から赤間往還を経て唐津街道赤間宿へと移動。一時赤間宿に滞在し、同年二月十三日に太宰府・延寿王院へと移転した。途中、赤間宿では約一ヵ月ほど福岡藩の御茶屋に滞在した。「五卿在筑資料・七卿在西日誌」によれば「同（一月）二十日予等五人五處ニ分離之談アリ。赤間御茶屋、三條殿（実美）御引受黒田家、宗像郡山田村増福寺三西殿細川家、遠賀郡高倉村神殿院予通禧有馬家、宗像郡陵殿（殿）寺村正法寺壬生殿薩州、吉田村鎮國寺四條殿鍋島家」など福岡藩の保守派勢力（俗論派）の意向で五卿は分離させられる危機もあったが、結局薩摩藩西郷隆盛や土方久元ら随従者の反対・調整の周旋もあって撤回され、五卿揃っての太宰府移転で決定した（8）。太宰府移転決定前の元治二年二月七日（「五卿在筑資料・七卿在西日誌」）には、随従者の水野正名・三宅左近らを太宰府に派遣し下見・検分に行かせ、「土地の風韻を有シ高貴ノ閑居ニ適セリ」（『七卿西竄始末』第五卷）と太宰府が五卿の移転・遷座の場所に最適だとの報告を受けている（9）。五卿一行は赤間から青柳～箱崎～板付～雑餉隈を經由し太宰府に移転する際、白砂青松の景勝地で知られた「海の中道」の景色・旅情を楽しんだり、香椎宮や宮崎宮などにも参詣している。途中、幕府目付（五卿守衛取締方）・小林甚六郎らの五卿奪還の動きを薩摩藩などの周旋・尽力で回避し、慶応三（1867）年に復官・朝廷に復帰・帰洛するまでの約三年間を太宰府に滞在して過ごした。慶応三（1867）年十二月、王政復古の大号令の前夜、朝議にて赦免され、五卿は官位や諱が復され、帰洛し朝廷に政治復帰すると、明治維新後は、三条実美が太政大臣や内大臣に任じられるなど、他の四人も参与など、それぞれ明治政府の要職に就いた。

五卿は長州藩領内では賓客扱いであったが、福岡藩領・太宰府では、太宰府に左遷された菅原道真公同様、延寿王院へ「謫居・幽閉」の状態でも知らぬ流適な生活境遇で、途中から「五人衆」などと呼ばれ、罪人扱いであった。しかし「月百両（後に二百両に増額）」など過大な生活費の支給や饗応、特産・名物の「博多織帯地」「（博多）素麺」など贈答品の応接を受けるなど待遇は公卿ということで破格であった。彼らは、四書五経や歌集・詩書の購読や連歌奉納・祈祷、馬術や鉄砲・射撃などの武事鍛錬を怠らず、来るべき帰洛・朝廷での政治復帰の日に備えていたという。

受入側の太宰府天満宮・延寿王院では、安楽寺天満宮別当で三条実実の父実萬と二従兄弟で三条西季知の歌道の弟子でもあった大鳥居信全や子の信巖、真木和泉守の甥にあたる太宰府天満宮の神官小野加賀家出身の小野隆助なども五卿の太宰府移転・受入への尽力はもちろん、太宰府移転後も五卿を物心両面から支え、応接・周旋した。

太宰府で「謫居・幽閉」状態であった五卿は、散策など移動可能な範囲は太宰府を中心に一里四方に制限されていたようだが、その一方で実際には五卿や随行者達は、太宰府における菅原道真公の伝説・伝承同様に多くの場所に出かけ行動している。

五卿は二日市の湯町・武蔵温泉（現在の二日市温泉）への湯治や、都府楼跡、四王寺山・宝満山・天拝山など太宰府周辺の名所・旧跡、周辺の村々を度々訪れている。他にも長崎街道筑前六宿の飯塚宿や内野宿や山家宿、薩摩街道の松崎宿（小郡市）、四三嶋（筑前町）の牧場や大庭村（朝倉市）、秋月城下などにも馬の遠乗りや視察、地元の人々との会合などで遠出している。また家老の三奈木黒田家（黒田播磨所領）をはじめ、通古賀の医師陶山一貫家、湯町・古賀の松尾家、山家の山田家（洗心亭・不老亭）、乙金の高原家、宇美の小林家（萬代酒造・竹亭）、夜須や大石村の岡部家、吉木の柴田家、阿志岐の平山家。四三島の岡部家など地域で酒造や金融も営む庄屋・大庄屋など地域の有力者層・旧家もたびたび訪れ、応接・饗応を受け、彼らに政治や資金協力を要請するなど交流したという。そして、太宰府の絵師吉嗣梅仙、萱島鶴栖など地域の知識人・文化人と交友し、各地に詩歌や書画などの作品を数多く残した。今でも五卿を応接し精神・物資両面から援助した五卿ゆかりの旧家には、五卿ゆかりの詩歌の短冊や掛け軸が家宝として残る。また、太宰府市西鉄五条駅付近にある旧古川家の屋敷地跡の金掛天満宮境内の三条実実「梅が枝にかかる黄金の花もまた根にかへりてや咲きいづるらむ」の歌碑や前述の太宰府天満宮境内・延寿王院の記念碑をはじめとして、太宰府市内や筑紫野市内を中心に「五卿関係遺蹟」が残る。

五卿の西遷は、赤間で一時期五卿の分割の案もあったが、最終的に五卿揃っての太宰府移転となる。太宰府移転の運びとなったのは、前述の五卿と太宰府天満宮とのゆかりや月形洗蔵や早川勇（養敬）など福岡藩勤王派の意向・周旋に加え、薩摩藩の周旋・対応、支援の影響も大きかったと考えられる。特に、西郷隆盛や吉井幸輔（友実）などの周旋の役割が大きかったようである

【史料1】 『玉里島津家文書』（河内一夫『玉里島津家文書』上巻、南方新社）
元治二年二月廿四日 吉井幸輔書状 蓑田伝兵衛・西郷吉之助宛 （10）

（包紙）

二丸 蓑田傳兵衛殿 西郷吉之助殿 吉井幸輔
春和の候、御兩殿様増御機嫌能可被為入、恐悦御同慶奉存上候、次ニ貴公様方愈御堅固御奉職可被成御座、珍重奉存候、隨而野生御同前罷在候、乍憚御安慮可被下候
当地彼是紛擾、大難事計二而、実に 朝廷之御苦慮奉恐入候次第御座候、
乍併一昨日廿二日閣老兩人參、内鶏鳴迄御談論被為在、一々御説破相成、
兩閣老一言も不相成退出仕候由、誠以断然たる御決答、恐入難有次第御座候、此上承服仕候得者、
天下太平無疑事御座候得共、又暴威を募り候歟も難計、実ニ大事之御場合と罷成申候、右次第委曲之儀者、小松君、大久保氏より可被申上候間、省略仕候、猶内田より詳悉聞取可被下候、
一出立之砌、春嶽公江御傳言之趣、酒井十之丞江面会仕候而可相成ハ福井迄參上、
御直ニ申上度申述候処、此節春嶽公、御近習之者大井弥十郎帰国仕候付、同人江被仰聞候而不苦候ハ右を以被仰進被下候而ハ何様可有御座哉之趣承り候付、
其辺之儀者、十之丞在京ならば如何様共時宜次第可致旨御沙汰被為在候間、大井氏江御直ニ可申上返答いたし候処、兩人同意、私方江參候付、承知仕候形行、大井江申聞、私儀ハ福井行取止申

候間、其段御披露可被下候、
一五卿分配之一条茂彼是六ヶ敷御座候へ共、先当時之処、程能五藩申合候様との処ニ而、一時治り申候、此等之儀、逐一仲之助（内田仲之助）より御聞取可被下候、
西郷君ニハ筑前辺迄御出懸之由、暫時なり共当地迄御出被下候へ者、至而仕合之事ニ御座候、
一天下之形勢、どふも難被黙止御場合ニ至り、尤此節者、御国是相定御機会歟と愚察仕候、橋公（一橋公）ニも拜謁いたし候処、余程前非を悔ひ候御話共御座候、
適是迄御仕懸被遊候御事ニ御座候間、御国是相立候御見留被為在候ハゞ、御尽力被為在度御事ニ而屈竟之場合を人ニせられ候ハ、些残念なる心地仕候、右公私取交、荒々、如此御座候猶奉期後音候、恐惶謹言、

吉井幸輔

（元治二年） 二月廿四日

蓑田傳兵衛様

西郷吉之助様

貴報

西郷は、薩摩藩士の吉井幸輔や蓑田伝兵衛、また京都の大久保一蔵や小松帯刀、内田仲之助らと協議の上、五卿の筑前太宰府移転の調整対応など五卿一件の周旋に尽力していたようである。

元治二（1865）年二月西郷に薩摩藩より五卿の待遇改善や五藩との調整周旋のため筑前出張命令（辞令）が出ている。

【史料2】 元治二年二月一日付 西郷吉之助 筑前出張命令
（「西郷家万留」『西郷隆盛全集』第4巻）（11）

西郷吉之助

右 御手許御用之儀有之、明二日急ニ而筑前辺江被差越候条可申渡候、
但御兵具方足軽壺人被召付候

二月朔日 数馬

また筑前出張の命が下った西郷の指示の下、西郷の補佐をするべく薩摩藩士の村田新八と坂木六郎が五卿付きを命じられている。二人は西郷と共に鹿児島を出発したようである。

以後薩摩藩士が交代で五卿の警衛、応接、周旋を担当するようになる。

【史料3】 元治二年二月二日 蓑田伝兵衛宛 西郷吉之助書簡（『西郷隆盛全集』第3巻）（12）

別啓 村田新八・坂木六郎 右兩人五卿御付き仰せ付けられ存じ奉り候、只今にて彼是相済まし候段相考え申し候。以上

（元治二年）二月二日

西郷吉之助

蓑田伝兵衛様

要用

太宰府での五卿は筑前福岡藩・薩摩藩・肥後熊本藩・筑後久留米藩・肥前佐賀藩の五藩へお預けの身分となった。五藩は「五藩周旋・応接方」として、連絡調整の上、警衛（「警固」・「守衛」とも）担当の五藩からそれぞれ太宰府在住の五卿の警衛役、「周旋・応接方」が出務するなど警備・応接の動員や五卿の滞在費の分担（毎月1藩200両、5藩で千両の負担）があった。地元福岡藩からは動員人数含め体制が特別体制で他に「応接掛・随従・宰府茶屋奉行財事掛」などの担当役職もあった。五卿の随行者や警衛の藩士達は、太宰府天満宮の社家・宿坊や町家などに分宿し太宰府に滞在した。また五卿警衛時の各藩の宿所が描かれた絵図「五卿滞在中警固投宿図」（個人蔵、別に『太宰府の五卿』口絵に掲載絵図も有）も残る（13）。

薩摩藩は、時期により変動はあるようだが、太宰府天満宮付近の連歌屋付近（勾當坊など）を中心に本陣・陣営や屯所を構え、宿陣・滞在したようである

当時は宰府宿に「大町旅館街」と呼ばれた旅館街があり、幕府の定宿「日田屋」、薩摩藩の定宿「松屋」、長州藩の定宿「大野屋」、現在は「菓子屋・梅園」で知られる土佐藩の定宿「泉屋（和泉屋）」、「大和屋」などの旅籠・旅館があり、五卿の随従者や五卿を面会に訪れた志士なども分宿・滞在したり、会合や宴会などで利用したようである。

また、太宰府に滞在した薩摩藩士は、五卿の警衛・応接・周旋以外にも、西郷や内田仲之助（政風）など薩摩藩の上層部から持ち込まれた対馬藩の革新派の家老平田大江一派と佐幕派との対立が原因の対馬藩の内訌一件や久留米藩の藩内の対立一件などの九州諸藩、他藩の藩内の諸問題の対応・調整にも追われている。以下は、太宰府を中心に久留米など各地を周旋で奔走した黒田嘉右衛門と太宰府に五卿の警衛で滞在した薩摩藩士三原次郎左衛門と関山新兵衛のやりとりの書簡である。

【史料4】『鹿児島県史料忠義公史料 第三巻』七五一号文書

元治二（1865、慶応元）年三月五日 太宰府在営三原・関山ヨリ黒田へ書翰（14）

黒田嘉右衛門様

三原次郎左衛門

関山新兵衛

自太宰府 丑三月五日

御袖別以来御左右不承候得共、追日暖気相催、一入御多祥可被成御奉賀候、然ハ致承知置候蒸気船小蝶丸（胡蝶丸）、一時日博多へ入津、昨日は内田仲之助殿右船ヨリ被罷下由ニテ、入来有之候ニ付、御沙汰之趣相達候処、多人数ノ乗組、其上荷物等過分ニ積入相成居、全体器械モ相損、此節長崎へモ差越、取締方等相成賦ノ由候へハ、逆モ対州マテ罷越候儀ハ調兼候段承得、今朝ハ早々出帆之由御座候付、別段御国許へ御掛合御手当不被成候テハ、御用立兼可申、此段早々御シラセ申上越候、以上

（慶応元年）三月五日

関山新兵衛

三原次郎左衛門

黒田嘉右衛門（清綱）様

二白、其許之御都合何様之御事御座候哉、星山氏（星山矢之助）へモヨロシク御致声被下度御願申上候、

別封三通認置候所ニ、内田氏ヨリ別紙之通申来、当藩之蒸気船ハ迎モ借入之都合相調間敷ニ付、
於長崎早々修復有之、便人等之儀ハ長崎ヨリ外船借受被差送、小蝶丸（胡蝶丸）之儀ハ、博多湊へ
回船有之候様、内田氏へ申遣置候、右之趣一往貴様迄御掛合、御決心之所、承届候上、右次第返答
ニ相及義、当然之事ト相考申候得共、左候テハ往返旁延引ニモ可罷成申談、右通取計申候間、左様
御得心可被下候、此段早々為御心得申上置候、以上

太宰府ヨリ（慶応元年）三月五日

関山新兵衛

三原次郎左衛門

久留米滞在

薩州

黒田嘉右衛門様

この時期、薩摩藩は京都や長崎、下関、長州藩領内や安芸広島などの情報収集や探索を目的で、
鹿児島から福岡・博多、太宰府、長崎、小倉などを拠点に薩摩藩の蒸気船の機動力を利用して、黒
田嘉右衛門や園田彦左衛門、土持左平太（横目）などの薩摩藩士を各地に情報・事情探索のために
派遣していた。また関山や三原や、他にも後述の渋谷彦助・蓑田伝兵衛などの様な太宰府に五卿の
警衛で滞在する薩摩藩士や中岡慎太郎や土方久元など五卿の随従者を仲介・中継し、国元の鹿児島
と京都や長州藩領など西国方面の国事周旋や情報交換を積極的に行っていたようである。この動き
は、薩摩藩が京都（禁裏）守衛業務や朝廷工作を含めた京都での国事周旋活動を担当・推進してい
たことや、第一次長州征伐前後の筑前福岡藩や薩摩藩を通じた「薩筑長一和・薩長和解」の動き、
幕府と長州との停戦・講和に向けた薩摩藩の政治動向や影響も大きいと考える。福岡・博多も近く、
長崎街道や日田街道、薩摩街道など諸街道が交差する交通の要衝でもあった太宰府を五卿の警衛・
周旋・応接という名目で、兵力を滞在・駐屯が可能な活動拠点にした薩摩藩は地の利に加え、五卿
やその随従者、五卿警衛で滞在している筑前福岡藩、筑後久留米藩、肥後熊本藩、肥前佐賀藩など
他藩を通じた政治ネットワーク・人脈という人の利を得て、国事周旋活動を活発化し幕末政局を有
利に進めていく。

【史料5】『鹿児島県史料 忠義公史料 第三巻』七六一号文書

元治二＝慶応元年三月黒田嘉右衛門宛国許御軍役奉行御軍賦役沙汰書（15）

御国許御軍役奉行・御軍賦役

筑前滞任御軍賦役

黒田嘉右衛門殿

篠崎彦十郎

右ハ、其許滞任五卿方警衛人数交替等ニテ被差出候付、致取締候様被仰付、其地滞任中物頭之場
ニテ被遣候

染川五郎右衛門、寺尾新之丞、大脇彌五右衛門、西郷友右衛門、大脇正之助、小山田休次郎、
御広敷医師 鮫島彦斎、

右五卿方為警衛被遣置候三原次郎左衛門一列へ、交代被仰付、左候テ津留金次郎・有馬英之助・
星山矢之助儀ハ、是迄之通被召置候旨被仰付候、

横目勤 蓑田新平・渋谷彦介、本占 田中正太郎、取払 有川休八、兵糧方 山口吉五郎、足軽二人

右五卿方警衛之人数交替等ニテ被差出、御賄之儀ハ京都守衛方之振合ヲ以、焚出被仰付候付、右人数別段被差遣候、

島津元丸家来「朱書（都城領主）」

組頭 土持撰右衛門、北郷棟太郎、右同人家来、上田矢兵衛、河野源左衛門、財部秀右衛門、加塩善之進、都留千左衛門、大草浅市、持田嘉右衛門、鎌田覚太郎、河野悦兵衛、上田平大夫、大峯太兵衛、鎌田九之丞、藤井慎哉、

右其許へ御用之儀有之、被遣候付、御用向之儀ハ篠崎彦十郎へ得差図、可相勤旨被仰付候、

右之通被仰付、今日差立被遣候付、着之上其許交代人数被差立候儀共、篠崎彦十郎へ被仰含越候付、申談都合能可被取計候、右衛門殿依御沙汰此段申越候、以上、

丑三月廿八日

御軍役奉行・御軍賦役

黒田嘉右衛門殿

とあり、現地太宰府では薩摩藩の場合、この時点では御軍賦役の黒田嘉右衛門（清綱）や物頭の篠崎彦十郎らの差配を中心に、五卿の警衛・応接・周旋が薩摩藩士の交代勤務で行われていたようである。⁽¹⁶⁾ またこの太宰府の五卿警衛・応接・周旋勤務には薩摩藩の「京都（禁裏）守衛方」の軍役動員勤務と担当者や人数の振り分けなどの面で連動していたようである。また後半の薩摩藩の私領の1つ都城領、「島津元丸家来」の私領土の一団は、文久二年の島津久光率兵上京の際の、その禁裏守衛の業務を分担補佐した都城領主島津久静の率兵上京の際の京都（禁裏）守衛の経験など軍事情験の経験もあり、その経験も考慮して選ばれ動員されたのであろう⁽¹⁷⁾。

また五卿の随従者の中には、大山彦太郎こと、土佐藩出身で後に坂本龍馬の盟友・陸援隊でも活躍する志士中岡慎太郎（石川清之助・誠之助の変名も）もいた。中岡は小倉で大島三右衛門こと西郷隆盛と会い西郷に心酔したようで、薩摩藩の黒田嘉右衛門にも面会したい旨を申し出ている。

【史料6】『鹿児島県史料 忠義公史料 第三巻』七五五号文書

元治二＝慶応元年三月九日大山彦太郎（中岡慎太郎）ヨリ黒田嘉右衛門へ面会ヲ請フノ書翰⁽¹⁸⁾

未得貴意候得共、自宰府一翰呈上候、先生之御事兼々去年於京師モ承届居申候、先月初吉井君（友実）と上京、於御邸モ色々御世話ニ相成、此節罷帰申候、根元ハ土左（佐）之者ニテ寺石ト申者也、於小倉大島先生（西郷吉之助）ニ拝眉仕候者也、

於京師天下真有志者ト様々約談仕、夫ニ付、先生ニ是非共御目ニカカリ度、御国迄モ事ニヨリ参上可仕相含居候処、此節是辺ニ御来光不計奇機、何卒色々拝顔相願度候ニ付、当宰府ニ御越被成候ハ、如何程御急候トモ鳥渡御沙汰被仰付度奉願上候、取急極失礼不顧呈一書申上候、再拝謹言、

三月九日夜

三条殿内 大山彦太郎

黒田嘉右衛門様

【史料7】『中岡慎太郎日記（海西雜記・行行筆記）』（尾崎卓爾『中岡慎太郎先生』収録）（19）

（元治二＝慶応元年）三月九日

晴、天気風日、此日対人四人及筑人薩人等と泉屋にて出會。対人等久留米に出立○

此夜、筑薩肥後酒を此別れに飲む。

（此日黒田嘉右衛門に書を送り面會を求む）

中岡慎太郎は、五卿の随従者として太宰府に来たことをきっかけに、薩摩藩との関係、交流も始まったようで、後に坂本龍馬と共に薩摩藩との提携を深め、五卿や薩摩藩の意向を受けて、様々な周旋活動や経済活動に関わり奔走するようになる。そのような志士の往来と薩摩藩士をつないだのが、彼らが滞在・交流した太宰府天満宮参道の大町旅館街の存在、地元の太宰府の志士達の周旋交流である。その代表的な事例として、松屋栗原孫兵衛と月形洗蔵、西郷隆盛の周旋・交流に関する関連の史料をいくつかあげる。

【史料8】「松尾家文書」

元治二年（慶応元年）二月二十三日付、月形洗蔵から松尾富三郎宛書翰（20）

謹啓、御案寧奉賀候、然者今夕、薩州西郷吉之助

鴻池山中成太郎同道ニ而、宰府松屋迄参居申候間、

塩猪肉鯉魚杯御恵被下候半ニハ、此上之大慶無御座候、

酔中失礼之申上事宜敷御聞及可被下候期待面晤、草々頓首

二月廿三日夕

尚々、馬関より持帰之兩種進呈仕候。御笑留可被下候、以上

【史料9】「松尾家文書」

元治二年（慶応元年）二月二十五日、月形洗蔵から松尾富三郎宛書翰（21）

謹啓

一昨日者、鯉魚并塩猪肉御恵贈被成下、深々辱次第ニ奉存候、

鯉魚者五卿衆献納、猪肉者西郷吉之助、鴻池山中成太郎一同賞味、

大庆之至ニ御座候。御礼為罷出候筈ニ御座候得共、福岡表伺之儀、差発、

只今より罷帰申候。四五日中者、又々当地江参可申敷と奉存候条、期其節、草々頓首

洗蔵（花押）

二月念五（二十五）日

富三郎様

【史料10】「松尾家文書」

慶応元年四月二十五日 西郷吉之助（隆盛）書翰 月形洗蔵宛（22）

薄暑相向候得共、弥以御壯剛奉敬賀候、陳ハ 尊藩江罷出居候節ハ始終丁寧之御会釈実ニ難有奉厚謝候。扱倉八君杯御上京相成相楽居候処、豈凶らんや、御帰国之事ニ相成、残念此事ニ御坐候。此度ハ決而御一掃之期と渴望いたし居候処、存外の事共ニ御坐候。畢竟薩筑一致之处、幕府にて大キに嫌ひ居候事と相見得、如何ニもして離間之策を用ひ度との腹中江、大音等之奸吏ヲ餌ニいたし喜んで策を旋シ候ものと被相聞申候。是非弊国之处孤立のものニ為す之策、十分有之事と相見得申候、近来関東におひてハ、再長征之儀ヲ促し候向と被相聞申候、此度ハ幕府一手を以、可打との趣ニ被相聞申候。勿論弊藩杯ハ如何様軍兵ヲ相募候共、私戦ニ可差向道理無之候間、断然と断り切る賦ニ決定いたし居り候。実拙き次第に立到申候。御遙察被成下候。私にも無抛用向有之、暫之間、帰国之賦ニ而京仕事候得共、至極差急キ候付、乍残念罷出兼候付、宜敷御汲取可被下候。藤井罷出候間、宜敷御談合偏奉希候。此度御厚礼旁如此御坐候、恐惶謹言

四月廿五日

西郷吉之助

月形洗蔵様

太宰府天満宮の門前町にあった旅宿、薩摩藩の定宿「松屋」（現在「維新の庵松屋」）の栗原家は、栗原孫兵衛（順平、雅号は「松籟堂」と号す）が勤王の志士であった。孫兵衛は社領組頭（明治維新後は年行司や社領相談役）など民政にも参加し、地元の顔役で義侠心に厚く和歌や連歌など風雅の道も好み、国学（平田国学）にも傾倒し、太宰府天満宮境内の「和魂漢才碑」の建立に尽力した。勤王の志士の周旋に熱心だったようで、薩摩藩の西郷隆盛や大久保利通、平野国臣などの志士が松屋を訪れ・滞在した志士達の書翰や和歌短冊などの資料が残る。特に、安政の大獄で追われ、西郷隆盛と鹿児島湾（錦江湾）に入水し非業の最期を遂げた勤皇志士・清水寺の僧、月照を松屋が匿った逸話に因む「言の葉の花をあるじに旅寝するこの松かげは千代もわずれじ 月照」の和歌（和歌短冊、松屋の庭園に記念歌碑）はよく知られている。また松屋に滞在していた西郷隆盛が手燈明で天神様にお祈りをしていた逸話なども残る（23）。

孫兵衛は加藤司書や月形洗蔵ら福岡藩の勤王派・筑前勤王党が壊滅に追い込まれた、いわゆる福岡藩の勤王派弾圧事件、慶応元年（一八六五）の「乙丑の獄（変）」で獄舎に繋がれたが、明治維新後に赦免され、大正二年にはその功績により従五位の贈位を受け記念の申告祭が開催されたという。

「元治元年子十二月 五卿方御受取御用金銭出入帳」（元治元年十二月～慶応元年六月までの出納書き上げ記録。福岡藩士・上野右内の記録。『五卿滞在記録』に採録）によれば、「三月十六日、一同（銀）三百八拾九匁五分 松屋ニ而水野溪雲齋出会入目正金貳分三朱汲物（吸物）共貳兩貳分薩州肥後佐嘉（佐賀）久留米出会之時汲物菓子酒肴御茶漬共其節磬女糸代八ッ八メ八百文分共 松屋孫平渡」や「五月廿五日（天神様の縁日） 一同（銀）拾匁八分 御用便方より長府の使者答礼焼もち（梅が枝餅か）百八代松屋孫兵衛渡」など、五卿滞在時の諸経費や出入り商人・業者などの記述の中に松屋の名前があり、五卿の生活や経済活動に支援者として周旋・協力を惜しまなかったようである（24）。また五卿が太宰府入り際には、同志で太宰府天満宮神官・勤王志士の真木和泉の甥の小野隆助と箱崎まで出迎えに出たようである（25）。

そして、『回天実記』によれば、「薩藩前田杏齋明日崎陽（長崎）へ出発ニ付、於松籟堂（松屋）酌別杯。」（慶応三年八月二十五日）、「暮頃より松屋并大野屋にて薩士と数輩と会合」、「暮頃より於松屋大村藩渡辺昇に会合」（慶応三年九月二十一日）など松屋での酒宴・会合が散見される（26）。

前掲の【史料8】「元治二年二月二三日付月形洗蔵から松尾富三郎宛の書翰」（「松尾家文書」）には、「然者今夕、薩州西郷吉之助鴻池山中成太郎同道にて、宰府松屋迄参居申候間、塩猪肉鯉魚杯被下候半二ハ、此上之大慶無御座候」と、月形の依頼で月形の友人の温泉奉行の松尾家（松尾富三郎）から松屋に滞在する西郷隆盛や鴻池・山中成太郎らに塩漬猪肉や鯉を差し入れご馳走したこと、【史料9】には、その手配に関する月形から松尾家へのお礼と感謝の意が記されている。

【史料10】には、西郷が同志の月形に宛てた書簡だが、「薩筑一致」という文言、「薩摩藩と筑前福岡藩の連携」が重要だと強調しているところと、「幕府が長州への再征を行えば、私戦として薩摩藩は出兵を拒否するという」幕府への対抗意識がうかがえるのが注目される。

薩摩藩の定宿としてだけでなく、五卿や随従者の応接・周旋にも尽力した松屋・栗原家には、五卿や土方久元・清岡公張ら従者達が松屋栗原家に世話になった謝意を記した「英華帖」などの記録・関係資料も残る（27）。ただその周旋が仇となり栗原孫兵衛は慶応元（1865）年の福岡藩による勤王派の弾圧事件、乙丑の獄で預かり・入牢の刑で処分されている。

松屋・栗原孫兵衛（順平）の事蹟が刻まれた墓碑（碑文は『福岡県碑誌』に紹介）が、西鉄太宰府駅付近の光蓮寺境内（現在は鐘楼付近に移動）に残る。その横には後述するが、元土佐藩士で五卿に随従（三条実美の従者）で太宰府に滞在しながら肺結核の病にかかり、志半ばで自刃してその生涯を閉じ、「勤王の志士・忠孝の志士」の象徴とされた山本忠亮の墓碑や高杉晋作が筑前に潜伏した先の中村家（旧中村酒店）の墓碑もある。

その松屋栗原孫兵衛の子孫家で現在、太宰府天満宮参道の喫茶・土産物店、維新の庵松屋には、年月日未詳だが、西郷隆盛の自筆の書簡も伝わる。

【史料11】「栗原家文書」（『西郷隆盛全集』第3巻にも収録）

年月日未詳 西郷吉之助 村山下総宛て書簡 （松屋 栗原家所蔵）（28）

（本文）

御安康奉賀候 陳ハ 先日御遣被下候荷物今日（昨日 見せ消し訂正）足輕宰領二而御用物之品を以大坂江相廻候間左様御得心可被下候、此旨卒度申上置候、以上

（上書き）

九月晦日 西郷吉之助

村山下総様

要詞（要用）上置

村山下総（斉助・松根）は、別名 北条右門・木村仲之丞で、元薩摩藩士。いわゆる嘉永年間の藩主跡継ぎをめぐるお家騒動、お由羅騒動で島津斉彬派だったため、薩摩藩を追われる身となり、脱藩して筑前国福岡藩領内、筑前大島（現宗像市）や福岡博多、上座郡（朝倉郡）大庭村（現朝倉市）や夜須郡四三嶋（現筑前町）などに潜伏した。そして、平野國臣や松屋・栗原孫兵衛ら筑前の

志士たちとも交流し、月照上人の九州・薩摩への逃避行を周旋・支援したり、太宰府天満宮の境内にある和魂漢才の碑の建立にも尽力した人物でもある。この書簡は、西郷吉之助（隆盛）が村山下総から遣わされた荷物を足軽宰領を通じて御用物として大坂方面への回送を報告・通知した手紙である。この西郷書簡が松屋に残った理由や経緯や年月日は詳細不明であり、村山が下総を名乗ったのは薩摩藩に復帰し、京都留守居副役となり藩命によって中川宮朝彦親王に仕えた以後、文久三年以降のことであり、『小松帯刀日記（慶応二年）』にも「村山下総之事」と名前が出てくるので、西郷が五卿周旋のため筑前と大きく関わった元治～慶応年間頃かと思われるが、史料年代などは検討を要する（29）。

第2章 薩摩藩の五卿警衛・応接・周旋と志士の往来（元治二年・慶応元年）

太宰府に移転した五卿の下には、中岡慎太郎（変名大山彦太郎、石川清之助）や土方久元（南大一郎・楠左衛門）ら土佐藩脱藩士、戸田雅楽（尾崎三良）や武部諫尾（清岡公張）、久留米藩脱藩士で勤王派の首領水野正名（溪雲斎）ら随従者に加え、西郷隆盛（吉之助）ら警衛の薩摩藩士、田中顕助（光顕）ら土佐藩士、渡辺昇ら大村藩士、小田村素彦（伊之助、塩間鉄造）伊藤俊輔（博文）、井上聞多（馨）、桂小五郎（木戸孝允）など長州藩士、福岡藩の月形洗蔵、早川勇、野村望東尼、そして坂本龍馬など多くの「勤王の志士」が訪れている。彼ら「勤王の志士」は太宰府で会合・談合し、情報を交換、交流し維新回天に向けて国事周旋を図ったことは前述のようによく知られていて、後に太宰府は、「五卿の西遷」の事蹟や遺蹟の顕彰を中心に「明治維新の策源地」ともよばれた。

坂本龍馬の太宰府訪問・滞在については、彼の日記「坂本龍馬手帳摘要」には、「廿三日宰府に至ル。渋谷彦介に会ス。廿四日伝（転か）法（三条実美）に謁ス。小田村に会ス。廿七日又謁ス。廿八日宰府を発ス。」とあり、慶応元年（1865）年五月二十三日から二十八日まで太宰府を訪れ、滞在している（30）。この坂本龍馬の太宰府訪問・滞在の過程については『鹿児島県史料玉里島津家史料』に関連の史料が発見され、『龍馬の手紙』（講談社学術文庫）にも紹介され、宮地佐一郎氏の解説にも詳しい。以下、関連資料を掲げる。

【史料12】『鹿児島県史料 玉里島津家史料 四』一三三四号文書

※宮地佐一郎『龍馬の手紙』講談社学術文庫にも収録（31）

○坂本龍馬ヨリ 渋谷彦助へ將軍上洛の件

（包紙ウラ書）

薩州御藩 渋谷彦助様

足下 坂本龍馬

〆

二白、本文ニ土方楠（楠左衛門・久元）ハ国元より出候ものゝ内ニハ一寄咄合て遺候ものにて候よし、時情も存候ものなり。以後御引合在之候時ハ必此者がよろしく候、かしこ

其後、益御安泰奉大賀候、然バ此度土方楠左衛門、上国より下り候。此者の咄、將軍家

曾て伝聞の通り、既に発足。東海道通行軍旅候て、人数五万と申事のよし、一件に付、岩下左兄（方平）、早々蒸気船を以て御国許に帰られ、今月十日頃ニハ西吉兄（西郷吉之助）及小大夫（小松帯刀）など御同伴のよし、承り候。夫ニ付てハ私よりハ書状ハ御国へハ出し不申、兎も角も御老（ママ）の上雅兄よろしく、土方楠左より長（州）及時勢被聞取の上、久ハ敷御国ニ御伝へ可被下候、先ハ早々謹白候。

（慶応元年）未（閏）五月五日

龍馬

渋彦大人 足下

追々 来五月六日桂小五郎（木戸孝允）山口より参り面会仕候所、惣方長州の論とハ余程大丈夫ニてたのもしく存候。当時小五郎ハ大に用られ国論なども取定候事書出候よしにて、ともにく（ともに）よろこび候事ニ御座候、かしこ

【史料13】 『鹿児島県史料 玉里島津家史料 四』 一三四〇号文書

※宮地佐一郎『龍馬の手紙』講談社学術文庫にも収録（32）

○宰府 蓑田新平（伝兵衛）、渋谷彦介（彦助）ヨリ在国西郷吉之介（吉之助）へ
—長州 事情探索の件

（包み紙ウラ書）

御国許

西郷吉之助様

宰府ヨリ 渋谷彦介、蓑田新平

閏五月十四日

（黒緘）

一翰呈上仕候。益御安康奉恐賀候、偕此内兄玉直右衛門付添坂本龍馬爰許へ差入、私共江曳合之上五卿方江、致拜謁、三条（実美）公より安芸守衛（黒岩直方）被差添、龍馬事、先達而長州江差越同所の事情探索之廉々御方様江一封を以、申上賦ニ而、直右衛門儀、当所江是迄滞在為致置候処、此節土方楠左衛門帰府候（便カ）より別紙相達ニ付、

いづれ之筋長防之情実等細々承得、私共より形行書付以御届申上心組ニ而早速右楠左衛門江致面会旁々承得候処、此度蒸気船より大山彦太郎（中岡慎太郎）御国許之様罷下、方今長州之形勢等申上賦承得候趣御座候間、疾ニ万端御聞取相成候事、右ニ付、別紙龍馬書面相副直右衛門差返申候間、右様御納得可被下候、此段大略如斯御座候、以上

宰府滞在

閏五月十四日

渋谷彦介・蓑田新平

西郷吉之助様

龍馬は、「(前略) 偕此内兒玉直右衛門(薩摩藩士) 付添坂本龍馬差入、私共江曳合之上五卿方江拜謁(後略)」(前掲【史料13】「慶応元年閏五月十四日 宰府渋谷彦介・蓑田新平・西郷吉之助宛書翰」と、薩摩藩士兒玉直右衛門の仲介・付添で太宰府入りし、五卿の守衛で太宰府に滞在していた薩摩藩士渋谷彦介・蓑田新平らの仲介で五卿に拝謁し、渋谷彦介や長州藩士小田村素太郎らに面会し国事周旋を図っているこの五卿との面会以降に、龍馬は小田村や五卿随従者の土方久元や中岡慎太郎らと共に、「薩長和解・提携」に向けて五卿の意向を受けて周旋するようになったといわれる。東久世通禧の日記「東久世伯爵公用雑誌」には、「五月廿五日土州藩坂本龍馬面会。偉人ナリ。奇説家ナリ」と龍馬と面会した際の印象を記している。

また、坂本龍馬と太宰府で面会した長州藩士の小田村素太郎(小田村伊之助・素彦、後の楯取素彦)も「塩間鉄造」と変名の上、五卿応接・周旋の使者として太宰府の五卿の下を訪れている記録(「慶応三年五月 太宰府五卿使者応接一件」など「太宰府滞留五卿関係書類」)がある(33)。

この坂本龍馬の薩摩から太宰府を経由し、五卿の随従者安芸守衛(黒岩直方)と共に長崎街道を経由し下関まで移動し、閏五月六日に五卿随従者で長府藩士・時田庄輔の周旋で桂小五郎と山口で面会し会合するこの一連の周旋活動や奔走が薩長和解のきっかけ、薩長同盟成立の発端となったと『防長回天史』などで評価されている。その背景には、五卿や薩摩藩、中岡慎太郎との連携や意向があったと考えられる(34)。

ただこの後、五卿をめぐる政治状況は、福岡藩の政治不安の影響を受け、不安定な立場となっていく。太宰府の五卿、三条実美から薩摩藩主島津忠義・国父島津久光に宛てた五卿をめぐる国事周旋・応接に関する薩摩藩への委任・委託状ともとれる書簡がある。

【史料14】『鹿児島県史料 忠義公史料』第四巻 二三一号文書

『鹿児島県史料玉里島津家史料 四』一五四二号文書にも収録

※『玉里島津家文書』(河内一夫『玉里島津家文書』下巻、南方新社)にも収録

慶応二年八月十七日

三条実美より島津父子(松平修理太夫(島津忠義)・島津大隅守(島津久光))宛書簡(35)

(包紙)

松平修理太夫殿

三条実美

島津大隅守殿

御密覽

一翰呈上致候、秋冷之節候処、先以御勇健被成御座大賀之至存候、抑方今之時體ニ就而者、別而御憂慮之義、恭察仕候、猶為国家御盡力之程、千祈萬禱之義ニ候、小生輩身上之義ニ付而者、昨冬以来不一方預御周旋、西郷吉之助始毎々以御家臣御懇示之段、不堪銘感、安慮罷在萬謝難盡候、猶此上宜希度、偏御依頼申候、扱亦当藩之義者、追々御承知之通、至当節、弥増切迫之事體、為皇国不堪憂歎、痛心此事ニ御座候、右ニ付而者、先達已来段々御説得御周旋之末、今日之形勢ニ而者、此後如何可有之哉、甚以懸念致候、定而御賢慮茂可有之、猶又御周旋之義、渴望之外他事無之候、此度御家臣大脇弥五右衛門帰国ニ付、愚意之旨密々相託申候、委細之情実等御直聴被下、御取捨偏御賢考被成下候様希望仕候、心緒縷々難盡毫端、右概略、是迄御無音打過候間、御懇婁之謝詞申述

度、且以当節之事情、旁密々寸楮呈上仕候、尚期後音候、仍如此候也、恐々謹言、

(慶応二年) 八月十七日

三条実美

松平修理大夫殿

嶋津大隅守殿

玉机下

二伸、時下折角御自愛專要存候、乱筆失敬之段、御海涵被下候也

右ニ別紙添 (筑前福岡藩正奸人名録 以下人名録は略)

とあり、この史料の年月日は慶応二年に比定されてはいるが、前年の慶応元年の福岡藩の勤王派と保守佐幕派との内紛及び勤王派弾圧事件の乙丑の変（乙丑の獄）以降の状況を示している。この事件により、多くの福岡藩の勤王派、加藤司書（切腹）、月形洗蔵（斬罪）や松屋・栗原孫兵衛（一族預かり・後に入牢）など五卿を支援した人々も弾圧処分された。三条実美ら五卿は慶応元年の福岡藩の勤王派弾圧事件、乙丑の変（乙丑の獄）以降、政情不安な福岡藩ではなく、薩摩藩主の島津忠義・国父島津久光に書簡を出し福岡藩や太宰府の現状を知らせようとしていたということは、明らかに薩摩藩の周旋を頼りにしていたことが伺える。彼らも福岡藩より「五人衆」という呼称の元、この事件を契機に五卿らの待遇は悪化し彼らの立場は不安定な状況となり、福岡藩を中心とした警備や監視体制が厳重化されると共に、幕府目付による奪還・護送、更なる危機を迎えることになり、ますます五卿や随従者の薩摩藩周旋に対する期待感や依頼度も増していったと考える。

第3章 慶応二年 幕府目付小林甚六郎の来宰と薩摩藩の対応

幕府は、慶応二（1866）年三月十五日に、目付小林甚六郎らに太宰府に赴き、五卿や五卿の随従者を監察することを命じた。翌十六日、目付小林以下、目付高橋平之丞・大原道蔵、小人目付五人、その他ら一行で兵庫を出航、三月二十三日に博多に上陸した。

福岡藩の記録「綱領」慶応二年三月十五日「観察小林甚六郎宰府下向」には、

「一閣老松平伯耆守宗秀ヨリ呼出、家来へ左書面被相渡。此度御目付小林甚六郎筑前宰府へ御取締トシテ被差遣候ニ付、三条実美始五人之者、為護衛差出置候家来共へ、於場所甚六郎ヨリ申達候儀モ可有之候間、可被其意候。」とあり、同じく「綱領」慶応二年三月廿三日「小林甚六郎一行福岡着」には、「一監察小林甚六郎議、初徒目付高橋平之丞・大原道蔵、小人目付五人、並別手組共上下八拾人海路下向、三月廿三日博多着船止宿。同晦日二日市駅ニ転宿。五卿ニ対面ヲ乞へ共、少日待へシト謝セラル。」と幕府目付小林甚六郎一行が博多から、太宰府に近く宰府往還も通じる日田街道沿いの二日市宿に宿陣（地域の伝承では二日市宿の旅籠・橋本屋に滞在）したことがわかる（36）。

東久世通禧の日記「公用雑誌」には「四月一日 晴、今日幕吏小林甚七（ママ、六）郎社頭参詣、検行坊へ立寄休息、五藩召出旨也、夕刻周旋方より目付五人へ面会致度、明日ハ差支候得共、其後何日成共勝手聞度ト申出、尤五藩承知」とあり、四月一日に幕府目付小林甚六郎一行は、太宰府天満宮に参詣し、五卿に面会を求めた。五卿の従者たちは、警衛している五藩との協議の上、一兩日は差支えがあるので改めて五卿との会見の場を設定することにして、小林一行に引き取ってもらったようである（37）。

四月四日、五卿の意を受けて先に帰国した肥後直次郎や堀平右衛門、西郷隆盛の救援依頼、連絡

を受けて、急遽阿久根より急行した黒田嘉右衛門（清綱）や堀平右衛門、川畑伊右衛門、三雲藤一郎ら薩摩藩士38名一行が太宰府に到着した。

四月七日、大坂で、筑前福岡藩に対し、幕府目付小林らに協力し、太宰府の五卿を大坂に護送するように命じられていた。いわゆる、幕府の五卿の奪還命令、計画である。

この時の状況は、五卿警衛の五藩の内、筑前福岡藩は幕府寄りの態度で、五卿を幕府目付に引き渡すという姿勢であり、肥後熊本藩や久留米藩もその動きに同調し、肥前佐賀藩も態度を明らかにせず、薩摩藩のみが五卿を支持し、従来通り五卿を守り抜く立場であった。三条実美以下、五卿や随従者は、薩摩藩に後事を託し、決死の覚悟であったことを後に述解している。

またこの時、四月十四日、薩摩藩は幕府に対し、ちょうど再長への出兵拒否の上書、いわゆる出兵拒絶書を西郷が案文を作成し、大久保が起草し、大坂で木場伝内の名で幕府に提出していた。

四月十八日に、黒田が要請していた薩摩藩の援軍、大山格之助（綱良）らが率いる約35名の薩摩藩士と大砲（野戦砲）3門が太宰府に到着した。

大山らは、翌四月十九日に二日市の幕府目付小林の元を訪れ、「藩命により大久保一蔵が大坂で幕府閣老 板倉伊賀守に対し、幕府目付小林らの太宰府監察の目的を尋問したところ、守衛する各藩の藩士を監督させるだけと答えたことに対し、なぜ五卿を大坂に連行し、帰洛・復職を周旋しようとするのか」と、幕閣と幕府と目付小林の見解の相違を詰問した。これに対し、幕府目付小林は、返答できなかったという。大山らは、その足で五卿の元を訪れ、幕府目付小林の詰問の経緯と結果を報告し、薩摩藩の状況を述べたという。

東久世通禧の日記「東久世伯爵公用雑誌」には、「廿一日薩州右（ママ）之人数面謁。大山格之助、上村笑之丞、山口鉄之助、坂本弥之助、加治木彦右衛門、伊藤蒙古、猪鹿倉源四郎、伊東仙兵衛、川越助左衛門、勝部新七郎、徳田新右衛門、左近允喜平次、伊地知卯十郎、森山新太郎、竹内喜右衛門、小森宗之丞、篠原吉兵衛、松田幸之助、平田休右衛門、湯地賢次郎、荻谷允右衛門、尾上弥右衛門、肝付十郎、上山孫七、山本勘兵衛、坂本八郎右衛門、大廻藤四郎、鴉木五左衛門、市来藤左衛門、神戸休五郎、讃良休蔵、吉見宗太郎、林正之進、酒匂藤兵衛」と、面会した35名の薩摩藩士の名前が記載されている（38）。

この陰悪な状況下で、五卿や随従者が心を一つにするような象徴的な出来事があった。慶応二（1866）年五月九日に三条実美の随従者である、元土佐藩士山本忠亮（兼馬）が、肺結核を病んでいたことを理由に、危急な際は役に立たないということを恥じて自刃した。

【史料15】『回天実記』慶応二年五月九日条（39）

同九日、曇、今早暁同藩土州山本兼馬忠亮死去す。同人兼てより肺病に悩み居候所、漸々病勢相募り、御奉公も難成候より終に憤慨の余割腹致候次第、洵に惘然至極なり。其絶命之詞に曰、一死雖軽義不軽、従容易實豈吾情、平常余罪何時尽、願学七生願至誠、恥をしりすつるうき身も武士のみちに違はぬこゝろなりけり、諸卿方も惘然に被思召、金子十五両被下、又条公には別に思召を以て金子二十両被下候 条公哀悼之御詠如左 山本忠亮か身まかりたるをいたみて つるきたち吾身のうきにそひ来つゝ 旅ちの露と消し人はも （中略）今夜山本忠亮神葬を以て宰府光明寺へ埋葬致し、八ツ半頃帰宿（以下後略）

『回天実記』には、五卿や随従者らは山本の殉死ともいうべき死を悼み、神式葬で光明寺に丁重に葬った様子が記されている。山本の霊や遺志、そして武士の魂や至誠の心に報いるために、更に一同結束し決死の覚悟を固めたという。

この際、五卿や松屋栗原孫兵衛などとも親交・交流のあった観世音寺村の大庄屋 高原謙次郎は、薩摩藩の幕府目付一行に対する対応について記述している。

【史料16】「那賀郡 高原氏記録」『福岡県史資料第九輯』（「高原家文書」）（40）

宰府守衛隊長薩州黒田嘉右衛門帰藩。先日より宰相殿同人へ御面話、五卿取計方は、其方とも不承知敷に相聞へ候。この事は修理太夫の命なるや、全く其方ともなるやと被申候処、黒田答に全修理太夫の命を受け候と申候処、宰相殿左らは帰藩の上、ケ様に申談様被申候より帰藩候との風評に候へとも相分兼候。此頃薩人の謡に

「ながひ（長い）刀はだてにはささぬあづま男の首をきる、ながひ刀はだてにはささぬ
今のいん循（因循）家の首をきる」この謡をうたふて二日市小林目付の門前を通るに至る。

とあり、幕府目付小林らを薩摩藩士が威嚇していた様子がうかがえる。また、大山格之助が野戦砲を率いてきたことから、太宰府で「火通し」や「稽古打・砲術稽古」と称して連日、薩摩藩が内山から北谷辺りに大砲の音を轟かせていた記録や伝承が残っている。

東久世通禧の日記「公用雑誌」には「（四月）廿四日 於内山村薩州藩小銃打試」「（五月）十八日 薩藩於内山筒試」、「延寿押印御用日記」（『太宰府市史』近世資料編「天満宮関係史料、延寿王院御用日記」）の慶応二年五月十六日条に「一、明後日十八日、薩藩指込之筒、内山村ニ而火通し御座候筈ニ付、為御承知此段御掛合ニ及置候、以上。」とあり、福岡藩の「五卿滞在日記」の慶応二年九月四日「福岡藩士・熊澤助左衛門上申書」に「薩藩之内於内山近々筒火通仕度御差支筋も有御座間敷故且又若手専ら稽古盛り之者同所ニおみて月々五六度充定日相立稽古打為仕度段同藩山田孫一郎より寺田嘉兵衛迄及相談候趣同人より申出申候、右ニ付火通し丈ケは兼而御指込之次第も御座候付強而催促仕候ハ、伺い之上御聞濟之处ニ而相答候心得ニ御座候へとも稽古打之儀は御差込ヲ相待居候処ニ答置候心得御座候條速ニ御指込被下度奉存候」、「綱領」十四（『黒田家譜』第七卷上） 慶応二年五月七日条にも「大山格之助（綱良）等壯士百人ヲ率ヒ、野戦砲三台ヲ曳キテ宰府ニ赴ク。宰府ニテ薩士寓卿ニ親シミ、幕吏ノ謁見ヲ妨グ。砲ニ火ヲ通ストテ、毎日近傍北谷辺ニ大小砲ヲ発ス。」とあり、薩摩藩が幕府目付側に威嚇の意味も込めたと考えられる「火通し」や「砲術稽古」と称した銃砲訓練や軍事訓練を福岡藩への事前相談・通告の下、地域と日限定で内山周辺で度々行っていた様子がうかがえる（41）。

また福岡藩の宰府代官で筑前藩周旋方・用弁方で五卿の応接・周旋を対応した寺田嘉兵衛の熊澤の上申に対する回答に「紙面の趣令承知火通之儀ハ差問無之砲術稽古之儀ハ最早冬鳥時節ニ相成候ニ付内情ハ不被相好義ニ候へ共稽古筋ニ付而ハ強而も御断被成兼候條月々五六度之处ハ三度位ニ而勿論定日相建必内山ニ而相催外向ニ而ハ砲發堅相断猥ケ間敷儀無之候様程克相答可被下候」とあり、福岡藩側も薩摩藩側に対し諸注意はするものの、衝突を避けるべくほぼ黙認していたようである。

そして福岡藩の「五卿滞在日記」には年月日不詳（慶応二年頃か）だが、「一宰府詰之薩州藩観世音寺村庄屋宅江罷越観世音寺地内山王宮境内江矢留之場所之候付、当時折々同所罷越射術致稽古

度旨申聞候付同寺引合候処聊差支筋無之由ニ付御支筋不被為在候ハ、彼方江申達候様可致旨同村大庄屋より御代官江申候段久野一角御財用郡町浦引受受持江郡奉行より申出候付承置候段及指図」とあり、薩摩藩が太宰府内・観世音寺敷地内の山王宮（現在の日吉神社）境内に五卿警衛に滞在している薩摩藩士の軍事訓練用の矢留場（弓矢の射術訓練場）を福岡藩に申請し設置していたこともわかる（42）。また、『五卿滞在記録』など五卿の日記・記録類にも五卿自身が来るべき日や有事に備え、武術や射撃訓練や軍事訓練を行っている様子もうかがえ、薩摩藩の軍事訓練の動きとも重なる。

五卿の随従者やなどの記録や郷土資料にも薩摩藩の「火通し」や「稽古打」などに関する同様の記述が見え、薩摩藩の幕府目付小林甚六郎らに対する強硬な態度や姿勢を物語っている。

薩摩藩はこれにより、幕府の五卿の奪還・移転計画を阻止し、太宰府の五卿の警備を強化すると共に、出兵拒否をし、幕府に対する対抗の姿勢を強めた。

このような状況下で、福岡藩は薩摩藩や薩摩藩士の幕府目付に対する強硬な姿勢や態度、その余波による騒動を恐れて、太宰府の警衛担当を二千人に増員し警備を嚴重にしたという。また内山・北谷方面や針摺・石崎方面などには、福岡藩の支藩の秋月藩の出張による警備動員もあった。

「綱領」十四「小林等下向を悔ゆ」には、「下向セハ五人衆ヲ直ニ渡スヘシト云シ故ニ来リシニ、案外ナリ。只下向ヲ悔ユルノミト云ヘリ。」とあり、幕府目付小林甚六郎らは、薩摩藩の阻止に合い、下向を後悔した記述になっている（43）。

いずれにしても薩摩藩の五卿奪還阻止の対応・周旋の効果もあり、五卿は引き続き太宰府で滞在することとなった。この点で、長州征伐や京都の政局だけでなく、太宰府においても薩摩藩の幕府に対する対抗姿勢は、幕府が目障りな存在と感じていた五卿を支援する形で、五卿の警衛・応接・周旋の過程で鮮明になっていく。そして、薩摩藩家老桂久武の書簡（「慶応二年四月二日付伊集院伊膳宛」・「四月廿六日付黒田嘉右衛門宛」）にも、この時期の太宰府での幕府目付出張に対する薩摩藩の周旋対応や状況報告が記されており、薩摩藩としても藩の地域戦略として「太宰府における五卿の警衛・応接・周旋」が重要な政治課題の1つであったと考えられる（44）。

第4章 五卿の帰洛・政治復帰と薩摩藩の周旋（慶応三年）

薩摩藩が幕府への対抗の指標、政治的命題の1つとして掲げていた五卿の帰洛・政治復帰については薩摩藩の周旋、特に大山格之助の周旋・尽力、支援が大きかったようである。

五卿の警衛・周旋を担当していた久留米藩士・剣術指南役の加藤田平八郎の日記「加藤田日記」慶応三（1867）年二月廿三日条には、「一昨日薩の大山格之助京都より到着、五卿御帰洛も勅許に相成、未細件条目等相済に不成候由噂。外四藩は一日後れ候故、近日着に可相成候噂。肥後秋吉久左衛門、肥前愛野忠四郎、筑前森三右衛門、筑後梶村俊八」とあり、他の五卿周旋方四藩よりも薩摩藩の周旋が進んでいた状況がうかがえる（45）。

同じく『加藤田日記』慶応三年三月三日条には、「薩州より太宰府へ出張の面々、周旋方吉田清右衛門、大山角之助（格之助）（二月廿七日国許へ出立）、元々役伊藤彌八郎、勘定役加納藤右衛門、医者一人、番士蒲生都城より三十人斗、足軽五六人上下都合四十餘、吉田清右衛門、蒲生番士の押にて予て蒲生に罷越居候由（以下略）※右 薩摩宿坊連歌屋坊 隠居の嘶也」

とあり、五卿の帰洛に向けての準備か、薩摩藩の私領蒲生や都城からも太宰府・五卿警衛のための番士の増員を図っている（46）。

そして、『加藤田日記』慶応三年十月四日条には、「薩の大山角之助（格之助）、九月廿一日京より宰府へ到着云、此節長州天朝より寛大之御所置仰付られ候に付、家老名代として上京致させ候様公儀より御達有之候に付、毛利内匠耄萬七千石右田 上京致候間、御帰洛の機会と大隅守も存込候に付、五卿の思召を承り候様申聞候、尤大隅守自筆の書翰も五卿へ到来、五卿は別に存寄も無之、兼て薩州御委任相成候由に付、直に格之助並に三条公諸太夫某同伴にて薩へ船廻に出立致候に付、諸藩護送の面々も太宰府へ罷越申候、此方様護送四人、十月四日宰府へ罷越候」とあり、薩摩藩の五卿帰洛の準備・周旋は相当早い段階から進んでいたようであり、五卿からもその準備・周旋を大山格之助を中心に薩摩藩に委任されていた様子もうかがえる（47）。

また、坂本龍馬も五卿の帰洛の周旋状況を意識していたようで、慶應三年二月十二日に下関の同志長府藩士の三吉慎蔵宛てた手紙、近況報告の「近時新聞」という書簡の中で、その状況を報告している。

【史料16】慶應三年二月二十二日 坂本龍馬 三吉慎蔵宛書簡「近時新聞」
（下関市下関歴史博物館 旧長府博物館所蔵）宮地佐一郎『龍馬の手紙』に収録（48）

近時新聞

○薩州大山格之助廿日関（下関）に来ル。則面会。

此人築前（ママ 筑前）ニ渡リ本国に帰ル。其築前ニ
渡る故ハ此度、朝廷より三条卿を初メ五卿をご帰京の事被仰出候よし、
此儀ニ依而の事なり。

先日井上聞太（馨）が京師より下りし時の船ニて、西郷吉（吉之助）ハ
御帰国致セシ。此故ハ薩候御上京の儀を以て下りし。

○此頃幕ニも大ニおれ合薩州にこび候事甚しく、然レども將軍ハよ程の憤発にて、
平常に異り候事共おゝく、ゆだん不成と申合候。

○薩の周旋此頃よ程行ハレ、先ニ御引込ニ相成候、廿四卿の御冤罪も相解ケ、築前（ママ 筑前）
の三条卿ハ御帰京の上ハ、天子の御補佐とならさせられ候よし、此儀ハ小松、西郷など
決して見込みある事のよし。然レバ先ヅ天下の大幸ともいうべきか、可楽〃（候？）。

○此頃將軍ハ海軍を大ニひらかんとて、米國へ大軍艦一艘船入ともに借入候よし。
五ヶ年ニて八十万金程費と申事のよし。幕、原一之進が咄し致し候よし。

以上五条

二月廿二日 認 龍馬

慎蔵先生 足下

中でも「薩の周旋此頃よ程行ハレ、先ニ御引込ニ相成候、廿四卿の御冤罪も相解ケ、築前（ママ 筑前）の三条卿ハ御帰京の上ハ、天子の御補佐とならさせられ候よし、此儀ハ小松、西郷など
決して見込みある事のよし。然レバ先ヅ天下の大幸ともいうべきか、可楽〃」の部分は、薩摩藩の五卿に関する周旋の度合いが他藩よりも先んじて多く、小松帯刀や西郷隆盛らが三条実美ら五卿に朝廷の補佐を期待している様子もうかがえ、同志である坂本龍馬ともその事を談じていたようで、とても興味深い。

また、『中岡慎太郎日記』慶応三年二月廿七日条には、「廿七日、晴、辰下比より大山、吉田及び肥（後）藩古閑富次、（清岡）公張等と、白水楼に別酌す。午后出轡久留米領松崎駅に至り飲す。府中にて夜入、瀬高にて夜飯、原の町南之関両駅の間筑後と肥後の境なり。」とあり、薩摩藩から大山格之助、吉田清右衛門肥後藩から古閑富次、五卿随従者の清岡公張らと大町旅館街の「白水楼＝泉屋」で会合している。「別酌」とあるので、出張する中岡慎太郎の送別の宴席であったようである（49）。ちなみの薩摩藩の大山格之助と肥後藩古閑富次は「肥薩応接方・肥薩周旋方」という名目で、五卿の周旋・応接の周旋業務で度々連携していた様子が肥後熊本藩の『肥後藩國事史料』の中の「尊攘録五卿一件帳」や「尊攘録探索書」などの幕末期の記録からもうかがえる（50）。また時期は少し遡るが、五卿の警衛・周旋も担当していた久留米藩士の加藤田平八郎の日記『加藤田日記』には、慶応二年八月廿六日条には「八月廿六日頃、太宰府へ罷越居候薩の周旋方伊集院某、肥後周旋方某、長へ罷越事情探索致し同所へ引取候事」とあり、薩摩藩と肥後熊本藩士が情報収集や事情探索の面で連携していた様子がうかがえる（51）。

『回天実記』慶応三年三月六日条には、「同六日 好晴、朝五つ時より御相馬、九つ時より講遺言、八つ時退出。其より薩藩陣営に行き豚汁之馳走を受け、入夜五つ時帰宿。（中略）正月十五日以来先帝崩御に付、諸卿方初以下一同謹慎精進罷在候処、昨日にて愈五十日相満候に付、今日より肉食其他武芸稽古平常之通被差許候、又御帰洛之儀も略ぼ相決候に付最早是迄通五藩守衛にも及間敷、諸卿方以下御出入勝手に被成度旨当藩周旋方より申出候事」とあり、孝明天皇の喪が明け、肉食も解禁され、薩摩藩陣営で豚汁を振る舞われている。この段階では、「又御帰洛之儀も略ぼ相決候に付最早是迄通五藩守衛にも及間敷、諸卿方以下御出入勝手に被成度旨当藩周旋方より申出候事」とあるように、五卿の帰洛も決定事項で、各藩の五卿の警衛や監視状態も形骸化してきている状況がうかがえる（52）。

『回天実記』慶応三年三月十八日条には、「同十八日 好晴（中略）薩藩中村半次郎・伊集院金次郎昨日京師より着にて今日面会、京撰之事情承之。暮頃より長使へ御酒被下に付罷越候処、伊集院、中村並竹田祐伯も来合せ後藤共六人に相成、薩長土三藩二人宛之会合にて談論愉快を極め、互に肝胆を披き夜四つ時に至り帰宿。」とあり、薩摩藩士の中村半次郎（後の桐野利秋）と伊集院金次郎が訪ねてきて、五卿随従者の土方久元（南大一郎・楠左衛門）や長州藩士や土佐藩士と京都や大坂方面の事情を酒宴も交え懇談している（53）。

この薩摩藩士の伊集院金次郎だが「回天実記」慶応三年四月二十一日条に「薩藩伊集院金次郎於満盛院酔狂之挙動有之」とあり、後に五卿の在所の満盛院において泥酔し、酔狂の上暴言や抜刀などの狼藉行為に及ぶ騒動を起こしている。

「今夜五つ時比大山格之介来曰、至極恐入候次第、畢竟私共不行届より差起候儀に付、今夕之処は私共取締置、尚明日本人覚醒之上篤と取糺処分可仕候得共、先不取敢私共より恐入之段申上候間宜敷御取計奉願候云々。早速其趣満盛院へ申上候事」と薩摩藩より大山格之助が満盛院へ出向き、伊集院金次郎の騒動を謝罪・釈明したようである（54）。

『回天実記』翌四月二十二日条に「同二十二日 晴、五つ時より満盛院へ罷出候処、条公御談に、金次郎儀大酔之体にて当方へ立越候由なれ共此方不在之場合にて見聞も不致、且同人儀は従来性質忠実之者にて少も異心無之者に付余り嚴重之取計致候も不憫之事故、格之助等へ心配不致様に可申聞との御沙汰に付、早速大山方に行伊藤矢八郎。加納藤右衛門も来合居申聞候処、一同誠に以難有奉存候。尚篤と評議之上処置振申上候段申出候。其より本陣に参殿、九つ時退出之処大山格之助来

曰、金次郎儀屹度処分可仕相含居候処、重々御懇命之思召に付、此度は無異議為相濟此後国事之為に死可申様一同より申聞、同人も右に決心、今日只今より発足上京仕候に付、御礼之義宜様奉願云々。其内中村半次郎、伊集院金次郎来り同様の口上申出候。暮比より当薩よりの案内にて泉屋に行、夜半より大野屋に転じ、薩藩、両肥諸士と大会遂に至天明」とあり、三条実美公はちょうど不在で伊集院金次郎の騒動を見聞しておらず、薩摩藩士の日頃の五卿に対する忠節、警衛・応接・周旋のお蔭か、お答め・処分なしの寛大な計らいで、注意のみの処分ですなきを得ている(55)。

それに意気を感じて大山格之助も中村半次郎も伊集院金次郎も国事周旋により一層一生懸命に邁進する決意を表明している。

そんな中九州遊説中の伊東甲子太郎が水戸人宇田兵衛と変名して、五卿の滞在する太宰府にやってきた。三条実美など五卿や水野溪雲斎(正名)ら随従者、久留米藩士真木外記や薩摩藩士吉田清右衛門らと京都の情勢や幕府の密計、自身の勤王の志などを語り合っている。

伊東甲子太郎「九州行道中記」には、「三月二日 四ツ時太宰府着、天神参詣、梅林の盛に匂ひければ、こち吹かばと言ひし昔ぞゆかしかれ今を春べとにほふ梅が香 まろうどは雲の上のきよみもてなしにあるじ顔なるにほふ梅園。夫れより真木外記に面会、水野溪雲斎、其他両三輩と形勢の談に及ぶ。薩の吉田清左(ママ 右)衛門に談じ旅宿。」とある(56)。伊東は大久保利通や中村半次郎ら薩摩藩士や長州藩士、坂本龍馬や中岡慎太郎、土佐の陸援隊など尊王攘夷派とも京都で交流し、後に新撰組を離脱し、孝明天皇の御陵衛士を名乗り活動するが、新撰組の近藤勇や土方歳三によって粛清された。坂本龍馬が落命した慶応三年十一月十五日に、近江屋に滞在していた坂本龍馬らが見廻組により命を狙われていることを伊東甲子太郎が忠告したことは有名な逸話である。後に五卿は帰洛復帰前、坂本龍馬、中岡慎太郎、伊東甲子太郎三人の死をほぼ同時期に知ることになった。

【史料17】『回天実記』慶応三年十二月三日～十二月五日条(57)

同三日 晴 今朝森寺和州来曰、京師より一左右あり。去月十五日之夜四つ時比於河原町下宿坂本龍馬・大山彦太郎(中岡慎太郎事)並龍馬僕共三人逢暗殺。龍馬は即死、彦太郎は十七日中に死し、僕は十六日夜死候由。実以遺恨憤慨之次第なり。又十八日之夜山稜衛士伊藤(ママ 東)甲子太郎も逢暗殺。其時は同志之者速に死体を駕籠に乗せ引取候場合へ、又々敵方来り互に及乱闘、三人は死し遂に相引に分れ候由。敵方も討死有之哉と被察候由。丹羽豊州は翌日見分に行候由なり。

入夜五つ時比小田児太郎来り、又京師之報知を語る。

同四日晴、四つ時満盛院に罷出候。小田児太郎今日出足にて馬関に向候や。薩藩一統より今夕坂本以下遭難に付見舞之品共来候事。

同五日晴、四つ時比両御殿に罷出候。今日於本願寺坂本直柔(龍馬)・中岡慎太郎(道正)之亡魂を神道を以祭候事。右に付、御殿より賜物有之、且御側中及随従面々薩藩士等も弔ひ呉入、夜五つ時比済候。条公より被下候御詠歌如左。

世を思ひ身を思ひても誓ひてし人のうせぬることそ悲しき
武士のそのたましひやたまちはふ神となりても国守るらむ
君かためよのため思ひ歎くには悲しといふも悲しかりけり

とあり、五卿や随従者、そして薩摩藩士に至るまでゆかりの人々が五卿や薩摩藩との周旋活動に

も尽力した坂本龍馬や、五卿随従者の1人でもあった同志・中岡慎太郎（大山彦太郎・石川誠之助・清之助とも）の死を悼んでいたようである。また、伊東甲子太郎とも交流した薩摩藩士の吉田清右衛門は度々、五卿の周旋・応接役として五卿関係資料に度々その名前が出てくる。

東久世通禧の日記「東久世通禧卿西溟日録」慶応三年三月二十三日条には、「廿三日 晴陰 薩州吉田清左（ママ 右）衛門上京、京信見聞之上為西下治定、木戸準一郎今日長へ引取同伴馬関へ行、夕景楠門へ藤花見物ニ行、三条被召也、昨日前田円雪（杏齋）より豚塩漬一箱・烟草（煙草）五箱・鯉節十五本到来、各国産也」とあり、京都に情報収集にも出張している（58）。

ところがその吉田清右衛門だが、慶應三年八月十八日に暴瀉病（コレラ）で急死する。

『回天実記』慶応三年八月十八日・十九日に、「同十八日（中略）入夜五つ時頃帰宿之处、薩藩吉田清右衛門儀俄然暴瀉病にて死去之趣承り直に見舞に行、四つとこ頃帰宿」、「同十九日（中略）其より薩藩宿陣に行、八つ頃帰宿。暮頃より又々吉田会葬に罷越、五つ半頃引取。葬式は神道にて墓所は山本忠亮墳墓の少し上なり。諸卿方より祭菜として金千疋被送候事」とあり、五卿や随従者からその突然の死を悼まれている。ちなみに吉田清右衛門の後任には中村矢之助が赴任している（『回天実記』慶応三年九月十二日条）（59）。

また、薩摩藩の中で、五卿の周旋・応接に尽力し重要な役割を果たしたのが医師の前田杏齋（元温・円雪）である。森重孝『薩摩医人群像』や彼の履歴記録などによれば、彼は、西郷隆盛の命で禁門の変の際に京都で病院を開設し、負傷兵の治療を担当した経験もあり、慶応元年に中岡慎太郎が鹿児島を訪ねた際に、病気がちの三条実美の容体を診察して欲しいと依頼し、門人の大島深造と太宰府に赴き、三条実美の侍医として、診察・治療・看護を担当するようになったようである（60）。

【史料18】『鹿児島県史料玉里島津家史料五』一六七四号文書

※『玉里島津家文書』（河内一夫『玉里島津家文書』下巻、南方新社）にも収録
慶応三（1867）年七月四日 前田杏齋「三条実美容体書」（61）

三条公御病氣愈々御平快、頃日者、二三里位者御歩行被為在、御飲食等茂御平常通り被為在候得共、元來御弱體、殊更御脚氣症有之、既ニ当月二日、速ニ御壯熱、増寒、御脈洪数殆御瘡疾之景況、御苦惱甚御座候間、則發表情解之藥劑調進仕候処、程能分利相立、今日迄も御熱發之模様無御座、聊御腹部之痙攣、御咳嗽、御腰脚之御攣急増減有之候得共、此節之様、御熱發御煩悶被為在候義者、初而之事ニ而御大患後故、大ニ配慮仕候得共、先御快方ニ相赴、仕合之至ニ御座候、併秋熱之時分柄、長々御淹留被為在候而者、御弱體、殊更御脚氣症御素有ニて、是迄者凌來候得共、此末如何之変症醸出候も難計、又々時氣御感ニ相成候得者、遂ニ御脚弱・衝心等之悪症蜂起仕者案中ニ御座候、就而者、涯々御上洛被為在、御加養ニ相成候得者、屹与御相応可仕見及申候、此段当時之御容體大略奉申上候、以上

前田杏齋

（慶応三年）七月初四

【史料19】『鹿児島県史料玉里島津家史料五』一六七五号文書

※『玉里島津家文書』（河内一夫『玉里島津家文書』下巻、南方新社）にも収録
慶応三年七月九日 前田杏齋「三条実美容体書」（62）

三条公元来賦性薄弱、事毎ニ感動スル事甚氏シク、当春比ハ諸証嶮悪、殆ント虚勞状ノ如ク寒熱往来、脈細数時々盜汗出テ、滑便動モスレハ一日ニ二三行腰脚攣急シ、心下刺痛、腹部之痙攣尤甚シク、小水モ多カラス、熱診数回、是レ脚気症タルヲ決定ス、此レヨリ魚鱈ハ勿論、膏粱ノ食味ヲ禁シ、食量ヲ減損ス、腰脚攣急ノ各処ニ鎮痙ノ香油ヲ摩擦シ、疎氣利尿ノ薬剂、健胃・鎮痙之丸散等間服セシム、適宜ノ運動ヲ進ム、爾来日々軽快、頗ル平常ニ異ナラス、去月廿九日ノ夜、冷氣ニ感触シ、翌朔日午時ニ至リ増寒發熱、脈洪数殆ト瘧疾ノ景況ヲ一蹶ス、乃チ發表清解ノ薬剂ヲ用ヒテ、其暴熱ハ纔ニ一日ニシテ解散スル事ヲ得タリ、然レトモ、咳嗽・心腹ノ痙攣尚甚シク、仍テ鎮痙ノ散薬等伍用シ、漸ク快軽ニ赴クヲ得タリ、夫太宰府ノ地タルヤ、東ニ米山、東南高尾山・天拝山蟠廻シ、西北ニ四尾寺山（四王寺山）・竈門山・岩屋岳聳へ、瘴癘ノ氣尤甚シ、秋冷ノ候ニ至リ、豈薄弱ノ體、其氣ニ感触セサルヲ得ンヤ、故ニ今時ニ当リ帰洛スルヲ以テ其病患ヲ救療スルノ良策トス、凡脚気ノ症、其生産ノ地ニ帰レハ、十二八九全癒ヲ得ル、予カ弁ヲ待スシテ、世人ノ遍ク知ル所ナリ、今又冷氣ニ再感セハ、嶮悪ノ諸症蜂起スル、踵ヲ回ラサス、摂養・食禁・運動等日々忠告シテ、其宜ヲ失ナハシメサラシム事ヲ要ス、今予カ日々焦思苦心スル所以ヲ述ル如此、此ノ嶮悪土地ヲ離レ、水土適宜ノ処ニ到リ療用（療養）セハ、頓ニ軽快ニ至リ予カ今時ノ苦思ノ半ヲ減セン事必セリ偏ニ迎船ノ神速ナルヲ希望スト云、

前田杏齋

（慶応三年）卯七月九日

前田杏齋は、三条実美の病状や容態から、元来病弱の性質もあり、「此ノ嶮悪土地ヲ離レ、水土適宜ノ処ニ到リ療用（療養）セハ、頓ニ軽快ニ至リ予カ今時ノ苦思ノ半ヲ減セン事必セリ偏ニ迎船ノ神速ナルヲ希望スト云」というふうには、周りを山地に囲まれ「瘴癘ノ氣尤甚シ」の太宰府の土地を離れ一日も早い帰洛による療養が必要と医師の立場から診断し、五卿の帰洛を後押ししている。

また、前田杏齋は東久世通禧の長崎行き・視察の一件にも、自身も長崎出張するなど周旋尽力している。慶応三年十一月二十四日から十二月十一日にかけて東久世通禧は薩摩藩士・東十郎と変名し、薩摩藩の大山格之助に事前に相談し、前田杏齋の周旋で、密かに長崎視察の旅に出かけた。また三条実美の内命により「長崎外人之事情探索」の目的で、それより3か月前の8月26日に薩摩藩医師前田杏齋と薩州藩士小沢庄次と変名した五卿随従者の戸田雅樂（尾崎三良）らを先遣隊として長崎へ派遣した。ちょうど長崎では慶応三年七月に浦上村での無罪のキリスト教信者68名の逮捕という大弾圧事件があり、フランス領事やアメリカ公使から長崎奉行に嚴重抗議があり、その騒動の情報収集の意味もあったかもしれない。

【史料20】『回天実記』慶応三年八月二十五日・二十六日条、(63)

同二十五日晴、正六つ時より砲射術的に行、四つ過引取。九つ前頃より条公、西三条、壬生、四条之四卿御供にて遠乗に出、浦の下山田勘十郎方に行、入夜四つ時頃御帰、薩藩前田杏齋明日崎陽（長崎）へ出発ニ付、於松籟堂（松屋）酌別杯。同二十六日雨、前田杏齋 戸田雅樂（尾崎三郎）も同伴なり。戸田は条公内命を受け、長崎外人之事情探索之為なり。九つ頃一行出足す

また前田杏齋と戸田雅樂（尾崎三良）の長崎行の様子は、関所で供の者が戸田雅樂と本名を名乗

り、正体を見破られそうになった話や坂本龍馬や海援隊との交流などの逸話と共に戸田雅樂（尾崎三良）の回顧録『尾崎三良自叙略伝』にも詳しい（64）。

『回天実記』慶応三年十一月二十四日条には、「同二十四日 曇、大山格之介、前田杏齋方に行、其より両御殿に罷出、七つ頃引取東久世殿今夕御微行にて崎陽へ御出発、御供は伊藤忠雄一人なり。」とあり、東久世通禧の日記「東久世通禧卿西溟日録」慶応三年十一月二十四日条には、「予密々崎陽行ヲ催ス、過日来薩藩大山格之助へ相談前田杏齋周全（旋カ）也、黄昏密ニ出門、伊藤忠雄随従大山格之助宅へ立寄酒饌を供ス、足軽増山次郎随従、頗被酒乘輿二日市ニ向フ、薩藩東十郎と仮称ス、原田・田代・轟木等継立有、関門中原継立（以下後略）」と薩摩藩の大山格之助や前田杏齋の協力もあり、東久世通禧は用意周到に準備し秘密裏に長崎に出発したようである。太宰府に帰還後東久世は長崎行きの協力・周旋の感謝の印として「大山格之助へ「鯉貳匹と酒貳斗」前田杏齋へ「帯地一筋」を送っている（65）。

東久世通禧は長崎では、浜町薩摩藩邸や山田屋覚兵衛宅などに滞在し、薩摩藩士で長崎間役（留守居）の汾陽次郎左衛門や同周旋方の五代才助（友厚）、森清助、喜納喜次郎らの案内や世話を受けている。そして汾陽や五代などと共に、出島阿蘭陀商館や諏訪神社、西洋料理屋、丸山の遊郭や料亭、英国商人グラバー（カラハ）など大浦の各国商館や邸宅、唐人の商館、大徳寺に寓した米国人フルベッキやボードインなど外国人（面接）、写真店、蒸気造船所、製鉄所、グラバーの製茶所、英国の軍艦などを視察・見物している（66）。この視察の経験が、王政復古後は後に政治復帰し明治新政府での外国事務総督を務め、外交折衝を担当することに役立ったと思われる。

慶応三年十二月いよいよ五卿が帰洛・政治復帰の日を迎えることになった。折しも慶応三年十月十四日に大政奉還、十二月九日に岩倉具視や薩摩藩の大久保一蔵ら討幕派主導の下、薩摩・土佐・安芸・尾張・越前の五藩の諸侯・重臣を中心とする会議の下出された王政復古の大号令（「京師大改革」）が諸大名に発表された十二月十四日、五卿は帰洛・復位の勅命を受け、十二月十九日に太宰府を出発の運びとなった。十二月十四日に薩摩藩の西郷晋吾（従道）と大山弥助（巖）が使者として、京都から蒸気船で赴き、博多に上陸し復位の勅命・沙汰を五卿に伝えている。十二月十九日帰洛に向けて太宰府を出発する五卿には薩摩藩士大山格之助・前田杏齋ら五藩の周旋方が随行し、薩摩藩士が護衛に着いた。

慶応三年十二月十九日の太宰府出立の際は、五卿や月形洗蔵、野村望東尼らと交流のあった通古賀の医師陶山一貫（斎・翁）が別れを惜しんで夫婦にて関屋・苺萱の関趾まで出向き、別れの挨拶（「暇乞」）・見送りをしている。その際、五卿一行の前を無礼に通過した秋月藩士島村文太夫の騒動を、妻が秋月藩出身で島村の知人でもあった陶山一貫が機転をきかし、「高砂」の謡の一曲を披露して奉祝し、陰悪な場の雰囲気を一変させ事なきを得た逸話も『回天実記』には記されている（67）。

『七卿回天史絵巻』や『詞書・三条実美公履歴』などによれば、三条実美ら五卿は太宰府に滞した後、陶山一貫と月形洗蔵の仲介で知り合い、特に三条実美は実美の父實萬（忠成）の書いた「赤心報国」の墨蹟と対面し懐旧し、和歌を詠み合うなど親しく交流している（68）。その後も慶応二～三年にかけて帰洛するまで度々陶山一貫宅を訪れ歓談交流し、和歌を詠み贈呈し合うなど懇意にしている。慶応三年二月には「三条実美（五卿）が中岡慎太郎を通じて大山格之助に帰洛のための周旋で鹿児島行きを命じた際に、陶山一貫宅に請われて立ち寄っている」記述も見え、陶山一貫宅にも薩摩藩士が周旋や交流目的で五卿と共に訪れていた可能性もあり、今後このような五卿と交流のあった太宰府の旧家と薩摩藩士の交流についても調査検討を要する（69）。

その後、五卿は箱崎御茶屋に一泊し、福岡藩世子黒田下野守（慶賛・長知）と面談し、「味噌漬鯛一曲、鶏卵一箱、博多帯地」など手土産を受け、十二月二十一日に薩摩藩蒸気船の春日丸に大山格之助や前田杏齋らと乗り込み帰洛の途に着いた。五卿にとっては七卿落ち以来の苦難から解放され、太宰府での国事周旋が報われた瞬間であった（70）。

おわりに

本稿により、幕末薩摩藩の五卿をめぐる国事周旋活動や他藩対応を中心に、幕末太宰府における薩摩藩の五卿の警衛・応接・周旋活動の実態を明らかにした。

薩摩藩は当初は西郷隆盛（吉之助）以外にも、吉井幸輔（友実）・大山格之助（綱良）・黒田嘉右衛門（清綱）・渋谷彦助・蓑田新平・前田杏齋など多くの薩摩藩士も五卿警衛や応接・周旋で太宰府に訪れ滞在し、五卿や各藩の志士たちと会合・交流し、「幕府による五卿の奪還阻止」・「五卿の帰洛・復位・政治復帰」などの国事周旋を政治目標に、様々な周旋活動を行った（71）。特に、『回天実記』や『五卿滞在記録』などの五卿関係資料・記録にも多く登場し、五卿や随従者にもたびたび面会した、黒田嘉右衛門や大山格之助、医師の前田杏齋の存在・活動などは、五卿の警衛・応接や周旋や薩摩藩の太宰府での国事周旋活動の中核であった。また土方久元や水野正名、戸田雅樂（尾崎三良）中岡慎太郎ら五卿の随従者や坂本龍馬らの志士も太宰府の五卿や薩摩藩の意向を受けての周旋活動も多く行ったようである。

『回天実記』では、前述の警衛の薩摩藩陣営で豚汁の馳走を振る舞われたり（慶応三年三月六日）、塩豚や鯉節、黒糖など薩摩藩の土産の贈答や松屋や大野屋・和泉屋など旅宿で五卿の従者や各藩の志士たちと会合、懇親、応接する記事なども多く出てきて、太宰府で「五卿」を媒介に交流・親交を更に深める形で、薩摩藩士を中心に他藩との「同志的結合・結束」を図り、他藩の応接・交流、情報収集・交換や折衝など他藩対応も積極的に行っていたようである。薩摩藩や長州藩、土佐藩など雄藩を中心とする薩長同盟や薩土盟約など「諸藩同盟・提携」の前提である志士の「同志的結合」や薩摩や長州を中心とする諸藩間の「和解・連携」に向けての素地は、五卿やその随従者に加え、五卿警衛・応接・周旋で滞在していた薩摩藩や福岡藩・肥後熊本藩、筑後久留米藩、肥前佐賀藩など五藩や長州藩・脱藩の志士などを仲介・媒介として「五卿の警衛・応接・周旋」という五卿の支援と、「五卿の帰洛・政治復帰」という国事周旋の政治目標を元に、薩摩藩が国事周旋の中心となり、太宰府でその政治基盤や九州における地域戦略を優位に進める活動拠点が確立しようとしていたとも言えるだろう。

「五卿関係遺蹟」に見られる、五卿が訪れたゆかりの地・応接・交流した旧家などは、現在の福岡県内でも、太宰府市筑紫野市周辺にとどまらず、宇美町、筑前町、小郡市、朝倉市、飯塚市など広範囲に及んでいる。五卿と交流のあった旧家などの史料の再確認調査と共に、五卿の西遷・応接と諸藩の志士たちの周旋や交流、特に、諸藩間や同志間の連絡・調整や談合・合意形成・政治決定など薩摩藩や筑前福岡藩、肥後熊本藩、筑後久留米藩、肥前佐賀藩など諸藩の太宰府における五卿の警衛・応接、国事周旋活動の実態、幕末の太宰府や五卿をめぐる政治状況や全国的な政局との関連性、「五卿の西遷」及び「五藩周旋応接方」が太宰府地域や九州の諸藩の政治動向に与えた影響の詳細な分析は再検討を要する。

そして、古来より、政治・軍事防衛都市として戦略的優位性を有し、天神様の聖地・門前町・宿場町（宿駅）など「太宰府」の持つ政治経済・軍事的な「地の利・地勢」・「都市機能」が、志士の

有志・同志的結合を促進し、五卿の「帰洛・朝廷復帰」を可能にした歴史的要因は何だろうか。

幕末の太宰府が、嘉永年間の菅公950年忌や安政年間の平田国学派の同志や薩摩藩脱藩士の周旋による和魂漢才の碑の建立、また太宰府天満宮や宝満山（竈門神社など）での攘夷祈願・祈禱やコレラなど伝染病退散祈願・祈禱などの地であったことも注目され、今後の検討課題である。

幕末の俚謡に「江戸が見たけりゃ宰府におじゃれ。やがて宰府は江戸になる」と謳われたようにかつての「天下之一都会」で、「さいふ参り」など江戸期の九州における代表的な観光・巡礼地でもあった「古都」太宰府の持つ「風韻・風光明媚」など都市の品格・優美な景観・風致や人々の応接・周旋力や文化力など「明治維新の策源地」としての幕末期太宰府地域の歴史像と薩摩藩の政治構造の再評価については、今年の明治維新一五〇周年を機に、今後の研究課題とし再稿を期したい。

註

- (1) 戦前の幕末の太宰府の歴史、五卿の西遷の顕彰については、江島茂逸『維新起原太宰府記念編』博聞社、1893年、江島茂逸・高原謙次郎『太宰府史鑑』菅公会、1903年、池邊義象『七卿落』辰文館、1912年、作間鴻東『維新實談 七卿芳跡』1924年、伊東尾四郎「五卿関係遺蹟」『史跡名勝天然記念物調査報告書 第九輯 史蹟之部』福岡県・1934年、太宰府五卿顕彰会編『五卿と太宰府』1935年、太宰府五卿顕彰会編『太宰府五卿記念館建設趣意書』1935年、七卿顕彰会代表沢宣一『七卿回天史』1942年、太宰府天満宮五卿記念館『太宰府天満宮と五卿』1943年など参照。また、『福岡県史資料』の中でも「五卿在筑資料」として関連史料も紹介され、福岡県史の編纂も担当していた伊東尾四郎により『史跡名勝天然記念物調査報告書 第九輯 史蹟之部』（福岡県、1934年）の中で「五卿関係遺蹟」として紹介されている。そして、昭和十年（1935）の「五卿西竄七十年記念（祭）」を機会に、太宰府天満宮・太宰府五卿顕彰会（現在は公益法人太宰府顕彰会へ継承）を中心に「五卿記念館」の設置も計画され、「五卿と太宰府」などの刊行や記念事業などで顕彰された。また、東久世通禧が中心となって三条実美の履歴を記した『七卿回天史絵巻詞書（三条実美公履歴）』1909年や、伯爵東久世通禧述『竹亭回顧録 維新前後』博文館、1911年、五卿随従者の土方久元の伝記 菴原鈿次郎；『土方伯』1913年や水野正名の伝記、武藤直治『水野正名翁傳』1933年、尾崎三郎の自叙伝『尾崎三良自叙略伝』中央公論社、1976年、土方久元ら瑞山会『維新土佐勤王史』1912年、1969年再刊などもある。

現在の太宰府天満宮の境内で、参道の突きあたりに位置する築地塀に囲まれた建物、かつて安楽寺天満宮の宿坊であった延寿王院（現在は宮司、西高辻家）には、「五卿謫居の間（現在非公開）」があり、梅や柿の古木のある庭園には「五卿遺蹟」の記念碑（昭和十六（1941）年十月、伯爵金子堅太郎撰・西高辻信雄書）が建立されている。また明治維新後、五卿にゆかりするものということで廃仏毀釈の難を逃れた延寿王院の山門前には、大正二（1913）年に建立された「七卿西竄碑」など五卿ゆかりの史蹟・記念碑も残っている。

- (2) 長沼賢海『太宰府の五卿』、太宰府天満宮、1965年
中野泰雄『七卿西遷小史 明治維新政治史序説』1965年、

井上忠「明治維新前後の太宰府天満宮」

太宰府天満宮文化研究所編『菅原道真と太宰府天満宮』下巻、1975年

井上忠「筑前藩の五卿周旋運動について」『福岡大学人文論叢』六一二・三合併号

井上忠「明治維新と五卿」古都太宰府保存協会編『太宰府の歴史』6、西日本新聞社、1986年、

(3) 梶原良則「幕末の動乱と太宰府（五卿と太宰府）」

『太宰府市史』通史編Ⅱ第二編近世の太宰府・第五章（第三節）、太宰府市、2004年

日比野利信「江島茂逸と『維新起原太宰府記念編』」太宰府市史編集委員会編『太宰府市史通史編別編 古都太宰府の展開』、第三章近代における太宰府研究、2004年

(4) 一瀬智「幕末期「五卿」の太宰府滞在について」

『五卿と志士—維新前夜の太宰府—』九州歴史資料館 企画展図録、2014年

一瀬智「勤王公家 五卿と太宰府」『西日本文化』四七三号、2014年、

丸山雍成「幕末福岡藩・福岡藩の政情と五卿落ち」

『九州文化図録撰書7 筑前維新の道』のぶ工房、2009年

古城春樹「七卿と幕末の政局 都落ちから帰京まで」

『九州文化図録撰書7 筑前維新の道』のぶ工房、2009年

杉谷昭「東久世通禧にみる七卿西国動座の実状」

『佐賀県立佐賀城本丸歴史館研究紀要』第3号、2008年

杉谷昭「「三条実美公記」にみる五卿筑前動座について（上）」

『佐賀県立佐賀城本丸歴史館研究紀要』第4号、2009年

杉谷昭「「三条実美公記」にみる五卿筑前動座について（下）」

『佐賀県立佐賀城本丸歴史館研究紀要』第5号、2010年

杉谷昭「「五卿滞在（日記）記録」にみる五卿の動静」

『佐賀県立佐賀城本丸歴史館研究紀要』第6号、2011年

杉谷昭「東久世通禧「西航日記」にみる五卿筑前動座の実状」

『諫早史談』第40号、2008年

杉谷昭「「三条実美公記」にみる五卿筑前動座について（続）」

『諫早史談』第43号、2011年

力武豊隆「薩長連合の先駆者月形洗蔵」

『九州文化図録撰書7 筑前維新の道』のぶ工房、2009年

刑部芳則『三条実美』吉川弘文館、2016年

(5) 佐々木克『幕末政治と薩摩藩』吉川弘文館、2004年

青山忠正『幕末維新奔流の時代』文英堂、1996年

青山忠正『明治維新と国家形成』吉川弘文館、2000年

芳即正『坂本龍馬と薩長同盟』高城書房、1998年

宮地正人『幕末維新変革史上』岩波書店、2012年

家近良樹『西郷隆盛と幕末維新の政局』ミネルヴァ書房、2011年

町田明広「第一次長州征伐における薩摩藩——西郷吉之助の動向を中心に——」

『神田外語大学日本研究所紀要』八号、2016年

- (6) 竹川克幸「幕末の太宰府と五卿の西遷—太宰府の「五卿関係遺蹟」の再検討—」『太宰府市公文書館研究紀要』第10号、2016年、竹川克幸「明治維新の策源地太宰府」『アクロス福岡文化誌9福岡県の幕末維新』海鳥社、2015年竹川克幸「幕末大宰府と五卿・志士～幕末古都太宰府散歩～」『西日本文化』四七三号、2014年など拙稿を参照。
- (7) 幕末の太宰府や五卿の西遷（西竄）については、『太宰府市史』通史編や『筑紫野市史』、『宇美町誌』など自治体誌類の他、『わがまち散策 太宰府への招待1・2』太宰府市、1990年、古都大宰府を守る会編『太宰府の歴史』6、同7、西日本新聞社・1986～1987年、太宰府天満宮編『太宰府百科事典』太宰府天満宮・2009年、森弘子監修・(財)古都大宰府保存協会編・太宰府検定公式テキスト『太宰府紀行』海鳥社・2011、『まると太宰府歴史展』太宰府市文化ふれあい館・2012年、『太宰府人物誌』太宰府市・2013年、山神明日香『長崎街道筑前黒崎宿での五卿の宿』2004年など郷土資料を参照。また、五卿関係史料・資料としては『日本史籍協会叢書 五卿滞在記録』東京大学出版会・1927年、1971年復刻、「七卿在西日記・五卿在筑資料」『福岡県史資料第三輯』福岡県・1934年、宮内省図書寮『三条実美公年譜』宗高書房・1969年、土方久元『回天実記』新人物往来社・1969年、「綱領一三・一四」福岡県立図書館所蔵（『新訂黒田家譜七卷上』文献出版、1984年）、「七卿在西日記（写本）」九州歴史資料館所蔵、『日本史籍協会叢書 別編 野史台 維新史料叢書 七卿西竄始末1～6』馬場文英編・東京大学出版会、1891～1905年、1971～1974年復刻、『同維新史料叢書 東久世伯西航日記』東京大学出版会、霞会館華族資料調査委員会編『東久世通禧日記』霞会館・1992年、『太宰府市史』近世資料編、太宰府市、1996年、『郷土資料叢書第一輯 五卿西遷—早川勇とその群像—』蘿山房、1985年、『七卿回天史絵巻』・『七卿回天史絵巻別冊 三条実美公履歴（詞書）』マツノ書店、1994年、『明治維新史料展』霊山顕彰会福岡県支部1994年などがある。
- (8) 『日本史籍協会叢書 五卿滞在記録』東京大学出版会、1927年、1971年復刻
- (9) 『日本史籍協会叢書 別編 野史台 維新史料叢書 七卿西竄始末5』馬場文英編・東京大学出版会、1973年
- (10) 『玉里島津家文書』（河内一夫『玉里島津家文書』上巻、南方新社）2006年
- (11) 『西郷隆盛全集』第四巻 「西郷家万留」一一一号文書、491頁
- (12) 『西郷隆盛全集』第三巻 補遺 一九九号文書 592～593頁
- (13) 太宰府市文化ふれあい館寄託、『まると太宰府歴史展』図録、2013年に収録、長沼賢海『太宰府の五卿』太宰府天満宮、1965年 口絵にも別地図が掲載、詳細不明。
- (14) 『鹿児島県史料 忠義公史料』第三巻 七五一号文書、895～896頁
- (15) 『鹿児島県史料 忠義公史料』第三巻 七六一号文書 902～903頁
- (16) 黒田嘉右衛門（清綱）については『黒田清綱伝』や『明治維新人名辞典』などを参照
- (17) 竹川克幸「幕末都城（一）島津久静の率兵上京について」『都城市史編纂だより』第4号、1999年、や『都城市史』通史編中世近世、2005年を参照
- (18) 『鹿児島県史料忠義公史料』第三巻 七五五号文書、898～899頁
- (19) 尾崎卓爾『中岡慎太郎先生』1925年
- (20) 「松尾家文書」松尾允之氏所蔵『九州文化図録撰書7 筑前維新の道』のぶ工房、2009

年に収録 35頁に掲載。

- (21) 「松尾家文書」松尾允之氏所蔵『九州文化図録撰書7 筑前維新の道』のぶ工房、2009年に収録35頁に掲載。
- (22) 「松尾家文書」松尾允之氏所蔵『九州文化図録撰書7 筑前維新の道』のぶ工房、2009年に収録 36～37頁掲載。
- (23) 松屋・栗原孫兵衛（順平）については、『明治維新人名辞典』、吉川弘文館、太宰府天満宮文化研究所編『太宰府百科事典』太宰府顕彰会、2009年、荒井周夫編『福岡県碑誌 筑前之前部』、大道学館出版部、1929年、山内興隆遺稿集『わが郷土太宰府』、『太宰府人物誌』などの「松屋・栗原孫兵衛・順平」の項目を参照。
- (24) 春山育次郎『月照物語』1927年、山内修一『薩摩藩維新秘史 葛城彦一伝』1935年、藤田敏彦『太宰府の伝説』1978年、『日本史籍協会叢書 五卿滞在記録』東京大学出版会、1927年、1971年復刻
- (25) 内野富士雄『小野（三木）隆助碑誌』福岡県立図書館所蔵
- (26) 土方久元『回天実記』新人物往来社、1969年
- (27) 栗原家資料「英華帖」については、朱雀信城・藤井祐介「資料紹介、栗原家資料『英華帖』について」『年報太宰府学』8号を参照。
- (28) 『西郷隆盛全集』第3巻 一八三号文書 574頁、前掲『太宰府の伝説』12頁収録
- (29) 村山下総・松根（木村仲之丞・北条右門）については『明治維新人名辞典』吉川弘文館や平野國臣顕彰会編『平野國臣伝記及遺稿』1916年、春山育次郎『月照物語』1926年、山内修一編『薩摩藩維新秘史葛城彦一伝』1935年などを参照。また『鹿児島県史料集22、小松帯刀日記』鹿児島県史料刊行会、1981年、慶応二年の項（P106）に「一 村山下総之事」とある。
- (30) 宮地佐一郎『龍馬の手紙』講談社学術文庫、2003年 574～575頁掲載
「坂本龍馬手帳摘要」
- (31) 『鹿児島県史料 玉里島津家史料 四』一三三四号文書、247～248頁
鹿児島県歴史資料センター 黎明館所蔵
宮地佐一郎『龍馬の手紙』講談社学術文庫、2003年 111～113頁に掲載
- (32) 『鹿児島県史料 玉里島津家史料 四』一三四〇号文書、258～259頁
宮地佐一郎『龍馬の手紙』講談社学術文庫、2003年 115～117頁に掲載
- (33) 『日本史籍協会編 楫取家文書二』東京大学出版会、1931年 207～218頁に収録の「太宰府滞留五卿関係書類」①「「楫取素彦意見書（慶応元年夏か）」②「慶応二年十一月 太宰府五卿へ御使一件」③「慶応三年五月 太宰府五卿使者応接一件」
- (34) 末松謙澄『防長回天史』1921年、柏書房より1980年再刊、マツノ書店よりも再刊
- (35) 『鹿児島県史料 忠義公史料』第四巻、二四八号文書、231～235頁
『鹿児島県史料玉里島津家史料 四』一五四二号文書、727～728頁や
河内一夫『玉里島津家文書』下巻、南方新社、2006年にも収録、
- (36) 『黒田家譜』第7巻 附録上 綱領 文献出版、1984年
- (37) 『東久世通禧日記』別巻、霞会館、1995年
- (38) 『東久世通禧日記』別巻、霞会館、1995年

- (39) 土方久元『回天実記』新人物往来社、1969年
- (40) 「那賀郡 高原氏記録」『福岡県史資料第九輯』(「高原家文書」大野城市教育委員会所蔵)
- (41) 『日本史籍協会叢書 五卿滞在記録』東京大学出版会、1927年、1971年復刻
『太宰府市史』近世資料編、1996年、「天満宮関係史料、 延寿王院御用日記」、
『黒田家譜』第7巻 附録上 綱領 文献出版、1984年など
- (42) 『日本史籍協会叢書 五卿滞在記録』東京大学出版会、1927年、1971年復刻
- (43) 『黒田家譜』第7巻 附録上 綱領 文献出版、1984年
- (44) 『鹿児島県史料集30桂久武書翰』鹿児島県史料刊行会、1990年、22～23頁参照
- (45) 『久留米史料叢書5加藤田日記』久留米郷土研究会、1979年
- (46) 『久留米史料叢書5加藤田日記』久留米郷土研究会、1979年
- (47) 『久留米史料叢書5加藤田日記』久留米郷土研究会、1979年
- (48) 原本は下関市立下関歴史博物館(旧長府博物館)所蔵、
宮地佐一郎『龍馬の手紙』講談社文庫、2003年、302～305頁、 収録
- (49) 尾崎卓爾『中岡慎太郎先生』1925年
- (50) 細川家編纂所編『改訂 肥後藩國事史料』国書刊行会、1973年
- (51) 『久留米史料叢書5加藤田日記』久留米郷土研究会、1979年
- (52) 土方久元『回天実記』新人物往来社、1969年
- (53) 土方久元『回天実記』新人物往来社、1969年
- (54) 土方久元『回天実記』新人物往来社、1969年
- (55) 土方久元『回天実記』新人物往来社、1969年
- (56) 『新選組史料集』新人物往来社、1993年
- (57) 土方久元『回天実記』新人物往来社、1969年
- (58) 『東久世通禧日記』上巻、霞会館、1992年
- (59) 土方久元『回天実記』新人物往来社、1969年
- (60) 森重孝『薩摩医人群像』春苑堂書店、1976年
- (61) 『鹿児島県史料玉里島津家史料五』一六七四号文書、259頁
河内一夫『玉里島津家文書』下巻、南方新社、2006年、
前掲森重孝『薩摩医人群像』も参照。
- (62) 『鹿児島県史料玉里島津家史料五』一六七五号文書、258頁
河内一夫『玉里島津家文書』下巻、南方新社、2006年、
前掲森重孝『薩摩医人群像』も参照。
- (63) 土方久元『回天実記』新人物往来社、1969年
- (64) 『尾崎三良自叙略傳』上巻、中央公論社、1976年、84～88頁参照。
他には伯爵東久世通禧述『竹亭回顧録 維新前後』博文館、1911年などを参照
- (65) 土方久元『回天実記』新人物往来社、1969年、
『東久世通禧日記』上巻、霞会館、1992年
- (66) 『東久世通禧日記』上巻、霞会館、1992年
- (67) 三条実美ら五卿と交流した、通古賀の医師・陶山一貫については、前掲『太宰府人物誌』
や『わがまち太宰府』、陶山鐵也他編『とおのこが風土記』太宰府市通古賀区、2003年、

谷川佳枝子『野村望東尼』花乱社、2011年などを参照。前掲『三条実美公履歴』によれば、三条実美・五卿の交流の証として宝満山の小松を送ったという逸話に因む、旧陶山一貫宅跡（個人宅）に残る「三条実美公の御手栽松」の由来については、陶山一貫の子孫陶山松庵が筑紫史談の郷土史家・江島茂逸に編集させた『勿剪勿伐 三條公手栽松由来』1894年や『とおのこが風土記』などに詳しい。また前述のように陶山一貫と三条実美の父三条実萬（忠成）とは旧知の仲で、上京した折に実萬から拝領した「赤心報国」の書（掛軸）など陶山一貫関係の古文書類や陶山家が拝領した五卿ゆかりの品々や所蔵資料は、現在は太宰府天満宮・文化研究所に寄託されている。

- (68) 前掲『七卿回天史絵巻別冊 三条実美公履歴（詞書）』マツノ書店、114～115頁
- (69) 前掲『七卿回天史絵巻別冊 三条実美公履歴（詞書）』マツノ書店、114～115頁
- (70) 土方久元『回天実記』新人物往来社、1969年、『東久世通禧日記』上巻、霞会館、1992年
- (71) 『五足の靴』の紀行や太宰府天満宮内・お石茶屋付近の歌碑「太宰府のお石の茶屋に餅くへは、旅の愁ひもいつか忘れむ」で知られる吉井勇は吉井幸輔（友実）の孫である。吉井幸輔については、『明治維新人名辞典』などを参照。

※本稿を執筆するにあたり、日頃太宰府天満宮崇敬会の会員としてお世話になっている太宰府天満宮（公益財団法人太宰府顕彰会、太宰府天満宮宝物殿・太宰府天満宮文化研究所、味酒安則氏・御田良知氏）をはじめ、太宰府発見塾（塾長森弘子先生・太宰府市文化財課）、公益財団法人古都大宰府保存協会（大宰府展示館・史跡解説員・太宰府市歴史文化遺産ボランティア・太宰府検定企画委員会）、NPO法人歩かぬ太宰府、太宰府市文化ふれあい館、太宰府市公文書館、太宰府市民図書館、太宰府文化懇話会（原田義昭会長）、太宰府市文化協会（高瀬昭登会長）、維新の庵 松屋・栗原雅子氏、王城神社氏子会、筑紫野市観光協会久芳康紀氏（故人）・井上初恵氏、松尾允之氏、高嶋正武氏、筑紫野市歴史博物館、つくし郷土史会、朝倉市立秋月博物館、秋陽会、久留米市立図書館、久留米市文化財収蔵館、有馬記念館、西日本文化協会、霊山顕彰会福岡県支部・京都霊山歴史館、福岡地方史研究会、九州大学附属図書館、九州大学記録資料館（九州文化史研究所）、福岡県立図書館、九州歴史資料館、山口県文書館、熊本県立図書館、長崎県立図書館、鹿児島県立図書館、鹿児島県歴史資料センター黎明館、黎明館調査史料室、尚古集成館、西郷南洲顕彰館、阿久根市立図書館・郷土資料館、国立国会図書館、霞会館、東京大学史料編纂所などの資料所蔵機関・資料所蔵者の方々、そして鹿児島県PR観光戦略部かごしまPR課・明治維新150周年推進室の皆様にお世話になり、色々とお教示、貴重な資料・情報をご提供頂いた。感謝申し上げます。

薩摩藩 五卿警衛・応接・周旋 関係略年表

文久三（1863）年 八月一八日の政変 七卿落ち

元治元（1864）年

禁門の変 第一次長州征伐

薩摩藩と筑前福岡藩が中心となり長州講和周旋 五卿の筑前移転が講和条件

※薩摩藩 西郷吉之助（隆盛）・吉井幸輔、大久保一蔵（利通）、税所長蔵（篤）ら
筑前福岡藩の月形洗蔵、早川勇、加藤司書 中村円太ら周旋

元治二（1865）年、※4月7日 慶応元年に改元、福岡藩 乙丑の獄

1月（正月）15日 五卿筑前渡海 黒崎着

1月18日 五卿 赤間着。赤間に滞在

2月13日 五卿 太宰府・延寿王院へ移転 ※西郷はこの時期太宰府に滞在

5月23日 坂本龍馬 薩摩から肥後を經由し太宰府へ 五卿に拝謁・周旋 ※下関へ

慶応二（1866）年

1月21日 薩長同盟成立。

3月23日 幕府目付 小林甚六郎一行博多から上陸、二日市へ宿陣。五卿奪還計画

4月1日 幕府目付小林甚六郎ら五卿に謁見。

4月4日 薩摩藩士黒田嘉右衛門等壯士38名、太宰府到着 五卿引き渡しを拒否。

4月18日 薩摩藩士大山格之助ら壯士35名 大砲3門で太宰府 五卿を守衛。

4月19日 大山格之助ら二日市で幕府目付小林甚六郎らを詰問

※大坂に於いて大久保一蔵 幕閣板倉伊賀守へ幕府目付筑前下向について尋問

慶応三（1867）年

1月15日 五藩により五卿復位帰洛 赦免の嘆願書を幕府（老中板倉）に提出

3月2日 新選組伊東甲子太郎九州遊説、太宰府へ。薩摩藩吉田清右衛門らと談義

3月18日 薩摩藩士中村半次郎・伊集院金次郎ら京都から太宰府へ 五卿に面会。

4月21日 伊集院金次郎満盛院にて酔狂之挙動有。幸い嚴重注意で終わる。

4月24日 陶（須恵）村の皿山巡覧。大山格之助・前田杏齋が同行。

8月18日 薩摩藩士吉田清右衛門、暴瀉病で急死。翌日神道式で会葬。

8月26日 薩摩藩前田杏齋、戸田雅樂（尾崎三郎）と共に東久世通禧の長崎視察に随行。

※長崎では五代才助（友厚）が対応

12月14日 薩摩藩蒸気船、博多に上陸

薩摩藩使者 大山弥助（巖）、西郷従道、五卿帰洛の旨 達書を伝える

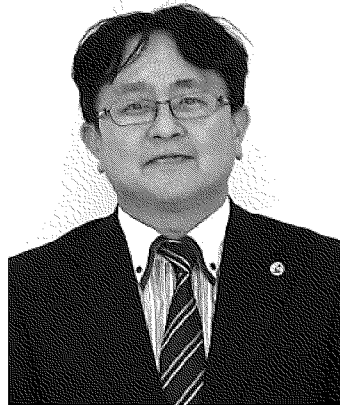
12月19日 五卿 太宰府を出発 箱崎へ 薩摩藩より大山格之助・前田杏齋が応接

12月21日 五卿博多より薩摩蒸気船春日丸に乗船 帰洛・官位復職 政治復帰へ

研究者略歴

竹川 克幸 (たけがわ かつゆき)

- 研究テーマ 幕末薩摩藩の国事周旋と他藩対応～九州 太宰府における五卿の警衛・応接・国事周旋を中心に～
- 所属 日本経済大学経済学部 准教授
- 略歴
 - 平成3年3月 福岡県立嘉穂高等学校卒業
 - 平成7年3月 鹿児島大学法文学部人文学科（日本史学）卒業
 - 平成10年3月 鹿児島大学大学院人文科学研究科日本史学専攻修了
 - 平成18年3月 九州大学大学院人文学府博士課程単位修得退学
 - 平成23年4月 日本経済大学経済学部 非常勤講師
 - 平成28年4月 同上 専任講師
 - 平成29年4月 同上 准教授
- 所属学会等 九州史学研究会、九州史学会、七隈史学会、鹿大史学会、明治維新史学会、鹿児島地域史研究会、福岡地方史研究会、古都大宰府保存協会、西日本文化協会、福岡県文化団体連合会、日本計画行政学会、日本観光学会



審査委員講評

○ 安藤 保 委員

第一次長州戦争の後、薩摩・福岡・佐賀・久留米・熊本の五藩が一人ずつ預かる形で九州へ移された五卿の太宰府滞在記における五卿の動き・五藩の対応・勤王志士などの動きに関する具体的研究である。

五卿滞在中、薩摩・長州藩士を含め他藩士や坂本龍馬などの志士との交流がこの地でなされたため、太宰府は「明治維新の策源地」と呼ばれた。人的交流面の表層のみならず、具体的内容についての研究を求めるのは無いものねだりだろうか。

薩摩藩が、五卿の応接・周旋に力を入れ、幕府の「五卿奪還命令、計画」を実力で阻止し、五卿の帰洛・政事復帰に貢献した事実は明らかにされたが今後の課題として、薩摩藩が五卿をどのように位置付け、また利用しようとしていたかという大局的検討が残される。

○ 佐藤 宏之 委員

幕末期、太宰府における薩摩藩の五卿の警衛・応接・周旋活動の実態を明らかにした論文。薩摩藩が中心となって太宰府において五卿の支援と国事周旋の基盤を確立しようとしていたことが明らかとなった。

福岡藩、熊本藩、久留米藩、肥前藩などの諸藩や長州藩、脱藩の志士などがあるなかで、なぜ薩摩藩が中心となり得たのか。それぞれにとって五卿の支援と国事周旋を行うことにどのような意義があったのか、それを明らかにすることが、薩摩藩の活動の意義を明らかにすることにつながるはずである。

○ 原口 泉 委員

西郷隆盛が慶応元年(1865)、太宰府で五卿を警衛中に菅原道真公の命日に際して手灯明を灯し供養したという逸話は有名だが、本研究は西郷隆盛をはじめとする薩摩藩士が、太宰府を拠点に具体的にどのような政治活動を展開したかということ、諸史料を基に明らかにしようと試みたものである。

従来、幕末薩摩藩の他藩との関係を見る際には、長州藩や土佐藩などとの交流が注目されがちであった。しかし、太宰府を拠点に構築された九州各藩との連携も重要な枠組みとなっていたことを教えられた。

竹川氏は、現在福岡県太宰府市を拠点に研究活動を行っており、地の利も活かして、福岡藩・久留米藩・佐賀藩・熊本藩、そして薩摩藩の史料を積極的に調査研究できる状況にある。本論文でもそうした史料を活用しているが今後さらに各藩の史料を積極的に活用することで、ますます研究の幅が出てくるものと思われる。

○ 宮地 正人 委員

どのような諸史料が現在まで整えられているかが教えられ、また前田杏齋のような医師の史料を明治6年10月の三条の脳病事件を理解するのにいいヒントになった。

政治史の立場からすると、今後さらに深めてもらいたいのは福岡藩についてである。五卿問題は第二次征長と一体不可分離な関係にある。そのためにも幕府は長州藩を孤立化させるため、親長州派が藩を指導している大藩・福岡藩の尊攘派一掃を画策し、幕府の意向を残した藩内守旧派が慶応元年10月の乙丑の大獄という大粛正を執行したのであった。幕府の勝利を疑わなかったからである。

とすると、征長の役が幕府に決定的に不利になったと判断するまでは守旧派が幕府の意向に沿った五卿の処分に努めるということになるだろう。その動きがあったのかどうか？もしなかったのであれば、あれほどの内部対立を作り出し、維新時において大藩福岡藩を決定的に落後させたものは一体何だったのか？薩摩の動きに封じられたという説明では、乙丑の大獄の説明がつかないのではないか。五卿問題は、薩幕関係だけの問題ではなく、薩筑関係の問題でもあったはずである。